316
162

始

316-162

連城紀聞

第一

大正
11. 9. 22
購求

國立國會圖書館藏書

乙丑連城紀聞第一

緒言

一、本書ハ小寺玉晁ノ蒐集シタル慶應元年ノ史料ニシテ甲子雜錄ノ後ヲ承ケテ連城漫筆ニ連續スルモノナリ小寺玉晁の略傳ト其蒐集セル史料ノコトハ東西評林ニ記載シタルヲ以テ凡テ省略ニ從ヘリ

大正十一年八月

日本史籍協會

乙丑連城紀聞

緒言

元治二乙丑歳攷考

當年ハ四季時候其時々先達來て大過專らに行ハるゝといへとも年内風烈しく又濕氣深し人民腦て暴死計りかたくして人氣穩かならす大人退て小人の邪佞の道行ハる意有然惡を去善に近づくよふニして身を貞固ニ守れハ上より助惠を受得る事有へし春ハ暖氣殊ニ早く發して時候宜し一度ハ徐寒さえ歸る事有へし又雷氣地震あらんか人氣穩なるへし夏は暑氣甚しく行はれて風雨の變有へし然共田方取付ハ宜しかるへし土地に依て刀乃之爭論か濕氣を受病災計かたく秋ハ殘暑ありといへとも早く冷氣を催ス へし風雨出水の變折々有へし人氣穩ならす冬ハ寒氣嚴敷事ハ近來稀成事ニして井水又川の流も氷閉渡る程之事有へし寒冷之邪を防く事を專一ニすべしおそはれ疼痛症(イタミシヤウ)を愁べし又盜難多からん摠而作り物早キものニ利潤有へし出來程になく實入惡しき歟取らすひかへる年なるへし土地に依てむし氣多かるへし先中分之年考

米　七分　麥　出來程に取實なかるべし
粟　七八歩　豆　六分
小豆　七分　綿　出來宜しけれども十分ならず

正月　時候暖にして曇天又雨有れ共中旬ゟハ天氣よく風はけしく月末ハさへ歸る事有へし人氣ハ穩成べし米相場安持合之中ニ少し上れ共格別之高下なかるへし

二月　時候暖なる中ニさへ歸りて寒風烈しく又曇天雨の日も風と成事有へし相場高下中旬ゟ人氣立て上ル歟

三月　春陽專らに行れて時候宜しけれ共雷氣にて天時くるふへし土地ニより地震あらん又時ならぬ暑氣を發する事あらん開花ハ早く相場小高下へ下旬ハ位宜しかるへし

四月　暑氣早く來れ共雨折々有て濕氣も深シ下旬ハ日和宜し火災有土地有へきか相場小高下にて上るよふにても格別の上りハなかるへし

五月　中旬迄ニ梅雨の氣專らニ行ハれて殊ニ濕氣深し國所ニ依而出水もあらんか雨の日も風と成事有雷氣も多かるへし相場持合中々位宜し月末ハ安キ歟

閏月　暑氣強く有共まゝニは曇天の日有て濕氣深く又風も有らん人民下痢ヲ患る事有らん米相場高下有共格別の事なし延米ハ高き方成へし

六月　暑氣甚敷行はれて夜分寐られぬ程の事有へし然共格別早魃ハなし土地により潤雨も折々あらん歟人民に病災多からんか米相場ハ極高直あらん

七月　殘暑強キ中ニ冷氣入交りて不順すへし風雨之天災度々有へし土地に依て作物大に損傷あらん相場人氣やかましく高き方なるへし

八　月　冷氣早く嚴敷成中ニ時候くるひ雷氣また異變あらんか相場大高下ハ無之とも位は宜しかるへし

九　月　冷氣嚴敷行ハれて霜も早く冬の時候を催して水も氷る程の烈風有へし人民ニ病災又盜難有べし相場持合之中ニ高直すへし

十　月　寒冷之氣強く來て霜氷嚴しく暖なると思ふ日も寒風と變しあられ飛雷之日まゝ有へし人氣のびやかならす相場高下有下旬ハ少し安き歟

十一月　寒氣嚴敷曇天又雪も多し然共雷氣ニ而暖成日もあらん歟又雨も有へし相場小高下なれ共不位

十二月　寒氣嚴しく烈風吹て井水又流水も氷程之寒氣有へし人氣おだやかならす相場高かるへし

○百人一首之内本歌とり

芽阳齋謹考在判

田地炎上
安藝の田の假のいをりの苦を燒て武子供にも杖ニもちつゝ

威勢
難波人みじかき智恵の愚知の間にあわれ此よふ伏してよとや

大江少戸
晝見れハ千々に物こそかなしけれ我身ひとつの智恵ニハあらねど

懺悔
此度ハ太刀も取あゑづたわけ武者もみじの錦かざる計りニ

五卿獄殺生前内證安心
程過て難つる力詠むれハたゞ赤さびの罪ぞ殘れる

義勢大拔
古しへてならぬ都の山口をけふこほたれて逆にけるかな

腰義武無士

大家様軍の道の蒔けれハまた踏も見す余り早引

浮澤陰

股引の古著てかわし姥嫁も狂余りなき無作寐なりけり

百人一首つくりかへ

宿陣にとられし寺の坊主衆ハ我衣手につゆにぬ(れ脱か)つゝ

妻や子をのこして來る討手衆ハなか〳〵しよをひとりかもねん

入込の余りて町人商人ハなかくも哉と思ひける哉

防長の百姓ともや町人ハうきにたえぬハ涙ぞけり

沖中にかゝりて居し監物を人ニハつげよ蟹のつり舟

長州の武者等に罪のあるなしかしるもしらぬも逢坂の關

摠督に來て出張したからはよを思ふ故にものおもふ見(み)は

兵粮の菜香のもの梅ほしハいづくもおなし秋の夕暮

其罪を聞かしニ行し御方ニハまつとしきかハ今かへりこむ

右衛門や信濃越後のした事は夢のかよひじ人めよぐらん

假建ニしたる尾張の人夫小屋やくやもしほの身もこかれつゝ

征伐をくやむ三士の家來等ハ人をも身をも恨さらまし

福原や國司益田の家來等ハ身のいたつらに成ぬへき哉

入込をあてに賣ふうりおんな行衛も知らぬ戀の道哉

德川の御世に軍といふことハいかに久しき物とかハしる

出陣に來れる武士の立時ハけふを限りの命とも哉

征伐かやんて夫々歸る身ハいまひとたひの逢事も哉

行列に著かざり立し陣羽織もみしの錦紙のまニ〳〵

警衛ニ寺に泊の御番衆ハあかつき計りうき物ハなし

征伐をゆるめる上の御慈悲ハ人の命のおしくもある哉

「金の鱗鉾輝きわたり初尾張を見屆たよい大將々々

「冠つけてもよい大將關東方には極内征々々

「何といふても扇（アフギ）はなこや留た要の工合よき内征々々

「西は極樂東は地獄鬼ハ武藏の原ニ住關東附ニハ内征々々

○亂入直傳一橋膏

功能

一治世を亂ニするニよし

一善人を惡人にするニよし

一禁中へ取入（しかより）によし

一後ロくらきを隱すによし

一大名を國へ引するニよし

一先祖の仕置を改るによし

一士風を亂ニするによし

一忠儀の者を遠さくるニよし

一營中を旅館ニするニよし

人飼入一門

一家族を國村へ遣るによし

一諸家の入費困窮によし

一本末を忘るゝによし

一關東の御威光を吸へらすによし

一夷人の爲ニよし

一大樹をからすニよし

一所々の惡を吸出し天下をくつかへすによし

功能爲し

一文政度此膏藥を製し中山備前守ニ上京いたさせ有栖川の妹を吸取候而後禁中へ取入功多し

一姉妹に此膏藥を持せ鷹司右大臣ニ媒せしめ追々宮堂上方を吸出し候事

一白川兵田に此膏藥ヲ渡置遊歷人を以賣弘候事

一天保度加州錢屋ニ渡置竹之島ニ而賣弘メ町々夷人を吸寄候事
一乍恐慶公定公此膏藥を以御命吸取候事
一姉小路ゟも渡置忠臣を談し候事
一大老を櫻田ニて吸取候事
一薩長土ヲ吸出し候事
一粟田宮を吸出還俗させ奉り候事
一西國中の軍兵を吸出し候事爲し知るへし
右の外功能多し殊ニ大名方を國々へ獨立セしめ威勢強く相成候事全ク此膏藥功能ハ世人か存所ニも可有之候間一々御披露ハ不仕候得共行末御大事と不思召御客樣方ハ御求可被下候終ニ國家亡とも相成可申候得共御望の御方ハ夫ニ相見候取次出店篤と御申込可被下候

禁物

一紀伊國蜜柑
一尾州隱玄豆
一肥後すいき
一近江源五郎鮒
一會津蠟燭

右之內蠟燭ハ取分け禁物ニ候間御養生中ハ御用ひ御無用功能卽座ニ失ひ申候誠ニ可恐敵藥ニ候事

右之品々決而御用ひ御無用ニ而且其外關東八ケ國之土產物ハ能御吟味之上御用ひ可被成候併是迄も御養生中は成丈御遠慮被成候方ニ奉存候近年ハ右之外ニも膏藥差合品も追々出來候由御客樣方より被仰聞候間なを出店共申合之上禁物書付近日摺出し候得とも先々只今迄の禁物御心得可被下候

諸國取次所
金看板御免

長州萩　長門屋膳太夫
常州筑波山　蘇生堂中
野州大平山　武田高運齋

内證取次

越前　福井屋親五郎　備中　松山屋才三郎（イ巴）
備前　岡田屋（山カ）九郎次　石州　濱田屋十郎
土州　親子屋土佐五郎　肥前　島原屋殿右衛門
因州　稲葉屋五郎次　阿州　皮屋音次郎
武州　川越屋山三郎　常州　土屋宗次郎
日光宇都宮道中　大和屋來三郎　當時賣出し見可申候　名古屋前十郎
東都小石川　水戸屋當十郎
京二條河内屋敷　一橋齋旅宿

摠本店
出店

摠本店の儀出情仕賣弘可申候處兎角番頭任ニ仕置候付先年ゟ本店ニ而ハ番頭ゟ專賣弘申候しかし先代格別工風之藥ニ候間二代目ゟも賣弘度候得共全躰藥種屋浪之士儀不得手ニ付追々商賣替仕度殊ニ當年姫路革之文庫へ入置候付老若ともきゝめあしく相成候付尚更勘考中ニ御座候乍去出店ならひに取次所ニ而賣弘候間御求可被下候以上

本家調合所　毒川齋昭軒製

蘊ハてる〳〵一橋曇る會津中川雨がふる
長藩も金利がほしい欲でまけ萩とられやうと人か岩國

親云
長ぼうやなせなく代
長坊
兒云
とささんかゝさんあいつがいじめていけない代
土佐　加賀　會津
親云
さつま芋でたますがいひ
薩摩　井伊

○丑春附合

因循で治る御代や松の華尊王よりもとかく金納
宮重(シゲ)ハ見かけ計が大きくて江戸に出さぬと賣ぬ立かへ
清る世を濁せし水や運のつき引汐合に見ゆる橋杭
棒鱈ハ味ひ薄し越の海しんハ手強き會津蠟燭
見へのみて弱き物なり加賀小袖米澤山でくへぬ仙臺
薩摩蠟くさきが照りハ至極よし東都向よき肥後の廻米
世に連て道ふみ迷ふ因幡山味噌べつたりと備前すり鉢
尼御前ほど御利益もなき筑後米澤絹のあつき手さわり
かゆき所手のとゝかなゐ肥前かき阿波の鳴戸ハとかく波立
土佐駒はいまだ噺しが治らず小倉袴のよくたもちけり
風につれ動かぬあきの案山子哉はかた帶地のしまのだゝくさ
鰭立て勢ひ見せよ近江鮒熊野の神ハほんのすへもの

人の目に見くるしからぬ伊達模樣伊勢の暦の日和こそ見れ
大垣に西國猿が手を燒てつしま祭が拍子ぬけする
立花ハあしき香ひもなかりけり腐た扇(本ノ)犬もくわない
鶴ヶ岡松を堅固に守るなりむき蛤も京て働らく
誰か見ても不意氣にみへぬ南部島津輕の鮭もちとハ喰れる
淀鯉は都の人の口にあゐ水毒けすはおもた●がよい(か脱カ)

天下變之一　武器甲冑

惡事第一

師曰阿蘭而外習之不亦惡乎有亞墨自遠方來不亦苦乎水戸不職不慍不亦
軍師乎
勇士曰其爲人也剛勢而好殺彼者多不好殺彼而好爲番者未受合也
軍師務本本立而事生剛勢也者其爲陣之本與
師曰黃金米穀少矣貪

老子曰吾日省吾身爲獨謀而不忠乎與夷狄交而不貧乎許而不信乎
師曰納献上之金省事而節用而化人募民以時
師曰妻子入則勞出則悌憐而仁等拜主而進陣組有與力則以學軍
子憂曰儉儉買武器備不貶能竭其力向海而能出其火與合衆交僞而無信雖
曰未亡彼必謂之亡矣
師曰軍師不多則不智役則不定主穩密無通不似己舟　止則勿憚改
騷子曰憤奢施多貧毒歸富貴矣
至變問趣向曰西夷至於是邦也必言其願禁之與抑與之與
趣向曰富主臆病狂脛姓以畏之富主畏之也其諸異人之恐與
師曰父在聽其概父沒觀我來年不辱父之跡可謂孝矣
獵師曰例之船和爲貴船頭之術斯爲善物体由之有所無據知和不以計伐之
亦不可從也
勇士曰陣近於火人可死也將陷於計蒙恥辱也夜不失其守亦可功也

師曰武具師欲無知飽物無買安於業而若於人就騷動而笑而可謂好惡也已
趣向曰貧而無貯富而無武器何如
師曰非也未若貧而謹儉而好兵者也
趣向曰日云如功如刺如突如破其我之謂歟
師曰趣乎早可與出師也已告諸答而知對者
師曰不患人之不武知患不解事也
新案酒氣曰飛(トン)多一篇右傳得童子之僻中矣余讀詳之其文愚而雜其論卑
下而無修理蓋出放蕩諸豎之僞撰也雖然往之又有功貶病者則令訂正而
不敢公也焉讀者以言之觸忌不可忽也

私軍勤　與殿閏　異遠也
德　外樣方　中國固
公爲捨　下著歸　神響恐」
濁大破　魚水寐　女夜成

上酒高醬油價越中解
禁止安無如少夢行悦」
○亜三月御觸之寫とて流布せしハ
先般爲御觸之通御病中ニは候得共數度被爲蒙
勅命無御徐義押而
御上京被遊候處兎角御眠勝ニ而不破遊御勝候間追々
御位仰被爲在候前關白散ニ飛鳥井を加へ黄金を澤山ニ入極蜜を以煉
藥被
仰付日々御用ひ被遊候得共兎角御同變ニ候間俄に被附
思召當時流行之二條家本法之關白湯に黄金加減被仰付二三貼御服用
被爲在暫
御目被爲覺御改氣ニ被爲運就夫篤と御熟考被爲在候而は是迄永
々御用ひ相成候金鐵等大根亂法に候間治世ニは可恐藥法ニ而殊更病氣

治りたる時は命を失ふ憂有之外ニ能なく一天無二之邪法と申候而本心
たる人は不用由被
思召候付而は速ニ御停止可被
仰出之處
御旅館之義ニ付御見合相成
御歸國之上は是迄調合相成居候金鐵頭(トウ)を初め紛敷分共不殘散シ役ニ被
仰付其内入念調合之分ハ關東人參(ニ)御申譯の爲一役々々ニ御吟味之上
御仕置被
仰出右ニ付若此上同藥出來致候而は彌以關東人參(ニ)御申譯も無之被
思召候付而は向後調合可致樣家中ハ勿論末々まて不洩樣相觸候樣にと
の御事候
但□(虫損)輔棗等等(ニ)も可被申聞候

三月

右之通片端殿被仰渡候付相達候得其意與死配等有之面々は與死配之方にも可被達候

三月　御　付

○藝州侯より被下候御品々

前大納言樣に

一西洋筒　五十挺

一樽　參荷

一鯛　貳荷

玄同樣に

一山水懸物　探幽筆

一□（虫損）平かれい　一箱

元千代樣に

一刀銘國行　壹腰

一きんこ　壹腰

貞愼院樣に

一白縮緬　三疋

一同　貳疋

一赤縮緬　壹疋

前大納言樣

御簾中樣に

一同

一同

一同

玄同樣

御簾中樣に

一同

一同
一同
壽操院様ゟ
一紺縮緬
一白縮緬
釧姫様ゟ
一縞縮緬
道姫様ゟ
一同
豊姫様ゟ
一同
以上
一西洋筒

壹疋
三疋
參疋

貳挺ッ、

成瀬隼人正
石河佐渡守
瀧川又左衞門
渡邊新左衞門
横井三太夫
間宮外記
鈴木嘉十郎
田宮如雲

一腰ッ、
壹疋ッ、
大道寺主水
千賀與八郎

以上
一刀
一山まい縮緬

以上

○馬關ニ張紙之由岩國ニ申來ル寫

君上被爲繼御先祖
洞春公之御遺志御正義御遵守被遊候處姦吏共御趣意相背名を御恭順ニ
托シ其實謀反四境カ流の敵申合恣ニ關門を毀新館を墜正義之士を逆殺し加
之敵兵を御城下ニ誘引シ隱ニ周防一國を割與シ候義約シ恐多脫カも種々御難

小瀨新太郎
石河竹次郎
横井右近
室賀只右衛門
櫻井乙四郎
松井市兵衛
竹中彦左衛門

題ヲ申立
君上御身上ニ相迫候次第御國家之御恥辱ハ不及申愚夫愚婦之切齒スル
處大逆無道我等世々
君恩ニ浴シ姦黨と義此所落字有歟供天ヲ戴す區々徹忠聊義兵ヲ起
洞春公之尊靈を地下に慰ス再
君上之御正義天下萬世ニ輝シ御國民安撫奉ル者也

丑正月　徹擊輩

○或人の筆記を見るニ
摠督樣評判區々にて近衛樣ハ十二月十七日早追ニ而在京役藝州ゟ來り
早く上京せよとの　命有
公邊ゟハ京ゟ立寄らずに早々參府との　命ニ飛車手王手の場合と相成
此上ハ大坂ニ止り有て御病氣と云外いたし方無之其內ニ御內輪取繕賞
譽の

叡慮を以一位を給ハり候半てハ難被立行次第ニも候半歟一位ニ御成なされ候とたとひ戸山の評起るともその難ハまぬかるへし仍此趣向ニ皆掛り被居候となり

但

禁裏ゟ菊の御紋附の御陣笠と御馬御拝領の上ハたとひ東國御征伐たり共一先　御上京在て　奏問相済

公邊ゟ御参府が當り之處　御上京不及御参府との今度

台命ハ御主意不貫と風説之

正月

○植松茂岳先生の詠

御心を廣島に君まし〳〵て長門の國を治めますらし

事をへてはやかへりませ菅の根の長門の國の名にこそ有けれ

○著甕期の歌と

人こゝろ横濱さしてたつ市はくにを商ふ所なりけり

あたならぬあたに騒て神國のあたをあたともいわぬ世そうき

田丸稻之右衛門

○前亞相公御凱陣之時獻詠

征矢一手はなちもやらて梓弓かへるは君かいさほなりけり

松平上總介忠敏

○丗二月十一日左之通大目付ゟ御届書

長州滯在之三條實美初五人之輩毛利左京家來追田伊勢之助差添正月十五日黒崎村迄送來同所おゐて請取申候段御用番ゟ御届申候

二月十一日

松平美濃守

○正月十八日左之通

毛利大膳父子伏罪之形迹相顯候ニ付追討諸藩一同及凱陣候由尾張前大納言以書取言上被

閉食此上は防長所置之儀卽今之急務寔
皇國之大事と被
思召候間兼而
御沙汰之通
大樹上洛被安
叡慮候樣屹度所置可有之旨被
仰出候事

正月

今度大樹上洛之儀更被
仰出候ニ付尾張前大納言儀暫被召留候旨
御沙汰之事

正月

越前矦同樣

○二月廿一日出京便

一二月廿日夜新門前ニ而十三才ニ相成候穢多を何者共不知切殺此夜曩
變差起可申風聞有之市中大分逆用意致し候又四月ニハ何歟起り可申
頻りニ風評有之候やはり長州方之人々申出候事歟と被存候
一藝妓博奕一條男女凡百人程有之今以相濟不申候
一此比步兵隊伍長壹人被切候由
一御所御築地ニ手足之跡有之候由夜中忍入候者も有之哉と申事
一兩閣老上京御用向不相知御附屬醫師若曾根宗桂懇意ニ付承候へ共相
知レ不申候大膳父子及五卿へ東下之一條歟と被存候へ共確說を得不
申候

○五諸侯より
朝廷ニ歎願書寫

臣等再拜稽首謹而奉歎願候今般常野州脫走浮浪之徒南越今庄宿ニ屯集

仕居候而指出候歎願書則遂披見候處間々觸忌諱候趣も相見候得共積年
確乎タル攘夷
詔命廢格し醜夷猖獗之暴慢を悲憤慨歎之餘り終ニ動干戈擅ニ爲私闘之
所業ニ及候得共臣等實父齊昭存生中兼々口實ニいたし居候尊攘也大義
遺訓地ニ墜落仕列藩離叛天下解體慷慨激烈之徒所々ニ蜂起彼是以痛哭
流涕之至り不得止事此及兵擧不恐鈇鉞之嚴罰ヲモ之誠意可恤之次第ニ
付去五月彼より差出候歎願書尚又臣茂政指添候建言其節御採用も不被
爲在候得共方今外寇渡來より内亂相生し既ニ長州脫藩之覆轍も有之須
臾も難差置臣等蒙昧之身是非得失も不相辨遽而恐夷奉歎候ハ恐縮之至
ニ御座候へ共何卒彼等志願之通洋夷掃攘之
詔命幕府ゟ御沙汰被爲成下候上彼等任仰願先鋒の寸備を被爲免候へは
一同感激奮發同心洽力して夷虜之陣營ゟ突入し
神州之勇威を輝し候ハヽ

叡慮透徹之一端と敢　雷霆の威を犯し奉懇願候時勢之危急天下人心之
渇望此事ニ御座候間廣海寬大之御處置を以彼等の徹夷御哀憐被爲垂被
下候ハヽ、
天恩之程深奉感戴可申候此段奉歎願候宜御執成御執奏奉懇願候恐々謹
言

（肩書皆朱書）
因州相模守　慶德
備前備前守　政
濱田右近將監　氏
喜連川左馬頭　綱
島原主殿頭　忠
和

丑正月

○水戸御家中何某ゟ之内狀中採要

扨國元ニ相殘り居申正議黨ゟも罪科被申立市川黨ゟ被打伏最早御承知
之通藤田建次郎戸田銀次郎而已殘り居頼と存居候處先達而御話之通藤

田等は十二月廿七日御用長屋揚屋入被申付候寔早戸田も頼居候處先月廿九日戸田銀次郎も揚屋入被申付其余有志之方兩三輩同日揚屋入被申付候段昨日内々承知申候寔早
先烈公の忠言水泡と相成水府家脈も是切と號泣之外無之候御垂憐可被下候左の通

正月廿九日

揚屋入　表御家老　戸田銀次郎　同
同　斷　御用人　久木直次郎　同
蟄居　御目付　桑原力太郎

右之通御座候

今奸黨市川等權威盛にして迚も不可敵仕合候へハ藤田戸田ヌラ如此有様故況や其下ニ附屬致居候者ハ此後如何可相運哉安然として死に陷り候を心外之儀と存候哉此間水戸ゟ七八輩正議家脫走江戸表さして上り

り候由姓名ハ未相分不申候尤當時水戸御所置ハ市川等幕吏と相通し相談之上可取行様子故水戸街道ニハ逃走之防きの爲幕吏ゟ隱て人數配申候由授昨夜之風聞ニは水戸浪人江戸近邊ニ而被召捕候と申由仍之水戸當屋敷ゟ昨夜中足輕三十人程役人共引纏ひ何方ゟとハ不存候得共罷出申候必右召捕人を可受取事と被察候余は拜眉可申上候以上

二月九日　何某

何　某　樣

○正月廿九日評定所御用

（朱書）
○附紙アリ末ニ寫ス

戸田銀次郎

去夏中市川三左衛門等江戸表ゟ罷登御家御爲筋之儀及言上ニ候砌其方儀表向同意之躰ニ而罷出押而血氣の諸生等一同出府之上大久保甚五左衛門岡部忠藏等申合種々虛妄之儀相構三左衛門初嚴重御所置方之儀遮而申上候處深

△附紙

思召之儀被爲在候ニ付一旦其意ニ御任セ被成候へ共直樣水戸表ゟ罷下り難行時勢を伺ひ早々押隱し三左衛門等ゟ又々同意之次第ニもてなし内密派黨を結ひ衆人を爲致惑亂御取締筋心付も無之却而御國難を相增候始末畢竟累代之御厚恩を仓忘却候故之儀と重々不屆之至ニ付嚴重可被仰付之處追而其方ゟ致隨從候者共賊徒追討戰爭之場所ゟ罷出及接戰候義も有之候付格別之御仁恕を以悴雄之介ゟ十人扶持被下置蟄居被仰付其方儀は居家敷家作共御引揚御用長屋ゟ被遣候條嚴重相愼可罷在者也

父銀次郎事不屆之儀有之候付嚴重可被　仰付之處格別之御仁恕を以居家敷家作共御引揚後用長屋ゟ御遣其方ゟ十人扶持被下置蟄居被　仰付候條相愼可罷在者也

戸田雄之介

渡邊半介

去夏中市川三左衛門等江戸表ゟ罷登御爲筋之義及言上候砌同意之体ニ而血氣之諸生等を誘引致出府同伴之者共不心得之所業有之をも不憚剩派黨を引立種々表裏之儀とも申上候始末御役柄ニは不相濟畢竟累代之御高恩を仓忘却候故之儀と不屆之至ニ付嚴重可被　仰付之處水戸表ゟ罷下り追而は軍場ゟも罷在及爭戰候義も有之候間格別之御仁恕を以悴吉萬麿ゟ十人扶持被下置蟄居被仰付候其方儀は居家敷家作共御引揚御用長屋ゟ被遣候條嚴重相愼可罷在者也

渡邊吉萬麿

文躰雄之介同斷

久木直次郎

其方儀元來心得不宜候處一旦改心致し候付愼御免被遊候處其後賊徒追討の方ゟ罷出及接戰候間御知行をも被下置候

得共從來之私情又々相募り笠井權六等申合內密派黨を引立衆人を爲惑亂既ニ太子邊ゟ出張之砌も種々妄言を以郷民を爲致動搖御改正を妨候而已ならす不容易企を致候義相聞不屆之至ニ付嚴重可被仰付處格別之御宥赦を以悴小太郎ゟ十人扶持被下置蟄居被　仰付候其方儀ハ御用長屋ゟ被遣候條嚴重相愼可罷在者也

久木小太郎

父直次郎事不屆之儀有之候ニ付嚴重可被　仰付之處格別……前文同斷故略之

笠井權六

其方儀必得不宜候處一旦致改心候ニ付愼　御免被遊尙又賊徒追討之方ゟ罷出及接戰候義も有之候間御知行をも被下置候處久木直次郎等申合不容易企いたし候條相聞畢竟私情可相遂との隱謀ゟ戰爭之地ゟ相進ミ又は東西ゟ奔走いたし御改正を妨候始末重々不屆之至ニ付嚴重可被仰付處格別之御宥赦を以悴鹿太郎ゟ七人扶持被下蟄居被　仰付其方儀は御用長屋ゟ被遣候條嚴重相愼可罷在者也

笠井鹿太郎

文言小太郎同斷

桑原力太郎

其方儀必得不宜候處一旦改心之姿ニは進退は致し候へ共從來久木直次郎等同志にて御改正を妨候所業も相聞候ニ付被　仰付品も雖有之亡父治兵衛事存生中積年之非を悔改心之上御爲筋骨折候儀も有之趣相聞候ニ付格別之御宥赦を以御役知行被召上七人扶持被下置蟄居被　仰付候條相愼可罷在者也

附紙×

○印戸田銀次郎附紙

市川三左衛門等江戸表ゟ罷登御爲筋等及言上候砌云々

市川三左衛門佐藤圖書朝比奈彌太郎去五月中人數引連罷登候處無程江

戸表執政職被命夫々御政体改革と唱へ兼々先主　烈公之主意を相守り候正論之有志ヲ不心得者などゝ稱して不殘此を押退先君を寃罪に陥し入悪逆奸計を廻し候而刑罰相成候結城寅壽之殘黨を擧用して　先君之遺業を一々破壞せんと企剩

幕府總裁職厩橋少將殿ヲ初メ正議之有志を退ケ鎭港之御廟議を妨け候事ニ關係いたし所謂己レか君を不忠不孝ニ陥入ルナリ是を奸徒却而御爲筋ト云右之所業水戸表ゟ聞へしかば常國之有志不堪憤激多人數出府市川等を退職させんとす此騒動を鎭靜として多吏水戸ゟ被召候中ニ戸田銀次郎此時ハ御執政　藤田建次郎此時ハ御用人も同樣被召登しかバ出府之上市川等之非義奸計ヲ言上諫諍相成候處上公ニも其言ヲ採用相成尚亦幕府ゟも人心居合不宜間市川等ヲ退ケ可然旨閣老内沙汰も有之ニ付佐藤市川朝比奈退職被仰付候事市川ハ此時野州邊ゟ出張中ニ退職被申付無之

△印右同人の附紙

御國難を相增候始末御役柄ニは別而不相濟所業云々

佐藤朝比奈等戸田藤田之爲メニ退職蟄居中水戸表ゟ被遣ニよつて奸徒宿意之遂さるを遺恨之餘り正論之徒出府中其空虛ニ乘シ人家ゟ亂入家財を破り武器ヲ奪ひ又は農民を爲致惑亂正論之農民ハ不殘賊徒同意之樣申觸シ家屋を打潰し無罪を殺戮し種々の亂妨相働キ國中不穩ニ付右騒擾爲鎭撫　君公御目代連枝宍戸大炊頭殿幷出府致居候正論之徒附屬水戸表ゟ被遣候ニ是又賊徒と流言いたし城下ゟ不入公邊幷諸家の人數を引入連枝幷正論の隨徒を討除せんと企しよりかゝる御國難を相增候也

又印渡邊半介之附紙

種々表裏之儀申上候始末

湊岩舟山と申所ゟ諸生群集太平筑波之暴徒ヲ討て先君　眞之遺志ヲ遂

度との議論ニ而集會する者數百人市川等も伴て此徒ニ同意す其主意ハ
別紙存意之通先君眞之主意の顯レさるを歎き曾攘の道廢頽を憂ひ是非
此儀を歎願せんと相約し去五月中市川初メ渡邊半介等數百人一同强訴
し無程市川も結構御役被　仰付候と卽刻已前の奸心を顯し却而先君の
遺志を破り鎖港之御廟議を妨るニ至る於此半介初同志の諸生も奸詐表
裏を憤り種々雖及言上其言不被行然のミならす半介をも參政職免せら
れしや市川等國權を握り私心を逞せんが爲に一旦僞て正論ニ同意し旣
ニ志を得るニ至て忽チ背叛其表裏反覆惡ムニ有餘然ニ半介を指して却
而表裏といふは何レの心得そや國家之亡非ハ古今不相變事と流泣いた
し候

×印桑原力太郎附紙

亡父治兵衛事積年之非を改心之上御爲筋之儀骨折候儀有之云々
治兵衛と申者ハ元ゟ正論之徒ニ而奸徒ニハ無之候得共先年水府ゟ

敕諚下賜之節天下ゟ開達之儀ニ付議論紛々之處治兵衛如何成所存にや
獨り異議を執て開達を支へし所遂ニ其議被行
叡慮遵奉透徹之事空敷相成ニ付此時ハ誰も奸と申せし之然ルニ此度別
段御爲筋之儀骨折と申事則此事を指して申事ニ而奸徒ニ而は其衆論を
排し
敕諚を抑留せし所ヲ以別段國家ゟ勤功骨折として其事の罪をも減スル
ニ至ル是ニ而奸徒の始終
叡慮を奉惱鎖論を破らんとするの心底顯然ニ而所謂主君ヲ不忠不孝ニ
陷ルとも可申奸徒ヤ、もすれハ本文ニ御爲筋の御改正のと稱する所何
等の御爲筋にや此ニ而奸徒之唱ル御爲筋之儀瞭然と知るへき也此ヲ以
テ多ク之正論之徒を罪科ニ陷シ入て皆賊徒ニ與力或ハ
賊徒ニ通スルナド稱唱戸田藤田初久木笠井等ニ至てハ逆徒を防キ而戰
功も有之故外ニ罪名之付ケ樣も無之然共戸田初正論之徒ニ而ハ役柄ニ

而且氣力も有之故其者共を許置候ハヽ、奸徒の爲不相成故かゝる取留なき文義を拵ひ罪ニ陥し入し也古今之讒言を以人を罪ニ陥る事有之共何か一廉是と申所可有之ニ此處之如く更ニ取る所も無之のミならす曾て他人ニ罪を負せんとして己レが爲せし罪條を自分から世に咄出スとハ其淺愚可笑なれ共又かゝる慘忍無法の事憚(本ノマヽ)なからすなすに至てハ如何なる事をなす共難計定めし此度を初として是ゟ陰ニ奸徒の所業を悪ミ少しく國家を憂ふる者ハたとへ如何なる防戰の功有之共或ハ己か同意ニ無之ニ稱し或ハ派黨を立ると稱して誰も々々禍を免るもの有之間敷此さき如何成行可申哉水府の大難無此上賢大人宜しく憐察し給ふへし尚種々申上度事有之候得共筆紙ニ難盡何レ來る拜眉の期も可有之候(条カ)樂筆留候御一家ハ勿論其外有志之御方々ゟ可然心憂御傳可被下候唯々尊攘の大道廢頽を悲歎血泣仕候再拜敬白華見月中旬

名宛

○大垣侯ゟ被　仰出

野州邊浮浪之徒降伏鎭靜候儀ニハ候へ共脫走之者共未何方ゟ潛伏可罷在も難計候付當四月

御神忌之節參向之攝家門跡方始堂上之面々途中警衛被仰付候間通行之節書面之通人數差出護送候樣可被致尤人數武器等之儀は銘々之見込を以無益之人數相省實備警衛相立候樣可被心得候

右之通相心得(委カ)達細之儀は山口內匠布施孫兵衛加藤寅之助可被承合候

右之趣相達候間可被得其意候

二　月

○京都ゟ大垣ゟ之來簡

一　公御不首尾之由阿部侯御用ニ而江戶ゟ御下り伯耆守樣大坂ゟ御下

りと申事

公武御說齟齬之樣被存中々容易ニ落著相成間敷種々浮說有之難波ゟ浪士多分參り候樣ニ申候

一南都ゟ御祭禮ニ付近衞殿初公家衆十七頭御下向之由

蒙古襲來之節同樣御警固諸侯方夥敷事之由

一尾州老公二月廿七日御參　內被爲在候

二月廿九日

○或人ゟ短冊に

冬　旅

ますら男とおもへるわれもふしわひぬ氷のまくら雪のさむしろ

松平上總介忠敏

○淀侯の旗に

可握則握　可施則施　千變萬化　彼莫能知

二嶋青明祕

○二月十日出江戸狀

一宇都宮は全家來共水賊に通し丹羽家之備へ錵砲打掛候由不届之事ニ候

一長州之賊徒貳千人餘船に乘先達而脫走之處正月六日ニ諸家之引拂を待チ蘊ゟ亂入長州勢大敗全山口城破却之論と申事長水共自分亡國を招く理是惡業之報と被存候

一當月七日ゟ府下四方之番所も引拂相成愈太平之世と相見申候兩三日ハ英人又々府下を徘徊いたし候橫濱ハ彌繁盛之由唐國近時ハサンハイの港交易盛ニ相成り廣東ハ衰微之由ニ多吉郎ゟ承候

○

とちはてし長門のうみの厚氷とけてのとけき春風そ吹

つるき太刀手にもとらすてまつろへしみいつかしこきみいくさの君

この二うたをかきて小田切ぬしのうまのはなむけとす

右貳首の歌ハ松平上總介忠敏殿詠の由

乙丑二月五日水野和泉守殿ゟ渡邊　御渡書

毛利大膳父子幷三條以下御所置之儀ニ付大久保紀伊守山口駿河守を以
被　尾張前大納言殿

仰出候趣被成御承知候處右一條ニ付而は段々御熟考之上御見込之次第
等委曲稻葉民部大輔永井主水正戸川鉾三郎を以被

仰上猶御家來を以も老中迄被　仰達候義ニ而只今おゐて右之外何とも
難能御勘辨兎ニ角前顯之趣を以此上之御所置有之候樣被成度旨等委細
御請被　仰上候趣達
御聽候處右は

御趣意も被爲在候ニ付いつれニも江戸表ゟ被召寄候旨被
仰出候依之大膳父子爲警衛御人數御差置可被成候右御人數御警衛方其
外指揮として駒井甲斐守御目付御手洗幹一郎被差遣候間御人數之義ハ
大坂表ゟ揃罷在右兩人之指揮ニ隨ひ候樣御申付可被成候右ニ付大膳父
子ゟ申渡等之儀は甲斐守幹一郎ゟ申渡候筈ニ候且又三條以下之者共は
松平美濃守御預之面々家來致警衛江戸表ゟ差越候樣夫々ゟ被　仰出候
事

毛利大膳父子幷三條以下之者共江戸表ゟ被召寄候旨被
候間早々御參府被成候樣被
仰出候事

御　請

毛利大膳父子江戸表ゟ被爲

尾張前大納言殿ゟ

召寄候旨大目付御手洗幹一郎ゟ申渡候筈ニ付人數大
坂表ゟ揃置兩人之指揮ニ隨ひ候樣可申付旨御書付之趣承知仕候然處大
膳父子おゐてハ兼而申上置候通之次第ニ付尤可奉畏候得共長防之士民
おゐて譜代恩顧之主人難見放抔之氣邊ゟ如何樣之變動も難計夫よりし
て終ニ增長仕候ハヽ天下之治亂ニも相關不被安
台慮次第ニ可及哉と深心痛仕候付不憚忌諱心底之趣申上候是等之見込
ハ副將松平越前守ニも同意之儀ニ御座候間長防之狀態篤と申上候迄は
兎ニ角御猶豫御座候樣仕度乍併一旦被
仰出候儀ニ付
御威光難相立
思召之程も可有御座此段實ニ奉恐察其邊之儀も乍不及盡慮仕候處私お
ゐてハ別段之見込難相立假令列藩ゟ被
仰付御主意貫徹之

御見込被爲在候共天下之御爲ニ相成間敷哉と痛所仕候右は不恭之至深
奉恐入候得共御爲一途ニ存詰誠實吐露仕候是等之趣
御恕察御賢斷被成下候樣仕度仍之申上候

二　月

○二月廿六日（イニ夜）

御厨子所頭水仕所頭高橋　御執次高辻渡邊三人共差扣被　仰付候

阿部豐後守
松平伯耆守

右は阿部豐後守本家相續已前御簇本之節　禁裏御附ニ而相詰罷在候時
分右高橋馴染ニ付此度同人を以大奥ゟ夥敷賄賂いたし候處不殘表向ニ
而御返相成兩閣老（イ共）も先々靑さめ候然處去廿七日兩老共參
內被　仰出八ツ時過ゟ大奥ゟ被爲　召翠簾三重被爲隔
出御まし〳〵關白殿下を初國事懸り堂上方一同出座關白殿下　御沙汰

ニハ近比老衰耳遠ニ付大聲ニ而應對可致と先大ごろしを取置今般兩人共上京之主意ハ如何樣之譯ニ候哉

御老中御請

今般上京之儀全京地之儀ニは無之幕府甚御手薄故一橋中納言御暇給り歸京政務爲預度旨大概松前伊豆守申述候主意ニ御座候

關白殿下

昨年大樹上洛之節滯京之儀被　仰出候處攘夷之儀ニ付而ハ一旦歸京之上ならでハ不行屆候付速ニ御暇給り跡之儀は一橋中納言御守衛總督として差置小事之儀は同所ニ而御卽答可申上筈再三仍願殘置候一橋中納言ニ有之且當地御手薄之儀は顯然之處ヶ樣願出候義は如何樣之譯ニ候哉

御　請

兩人共新規者ニ而其儀不相辨候旨申上

關仰

たとへ其方共不存候共旣ニ酒井雅樂頭水野和泉守ハ願濟取扱兩人共未在勤中根元ハ大樹ゟ之出願ニ付大樹も大樹使も使不都合之儀仍其儀ハ更ニ不相成旨被

仰出兩人共暫閉口

御　請

右等之義一橋中納言と相談之上御請申上度一先御下ヶ被下度旨

關仰

每度之參　內無用仍今日一橋中納言を可被爲召候付

御前おゐて相談可致旨被　仰出

御　請

左樣ならハ右相談之儀は濠

御免度旨申述候

關仰

今度其方共武士多人數召連候哉之趣承知いたし候右ハ如何之心得ニ候哉

伯耆守御請

攝海等ゟ異船乘込候哉ニ承知仕候（イ風聞相聞）付右異人万一何樣之事可致も難計候付若一（イ萬々）之爲召連候旨

關仰

左候ハヽ當地ニは無用之者早速伯耆守召連攝州ゟ相越右御守衛可致候付而は宸早當地ニは御用も無之候付速（イ間）ニ浪華ゟ可相越候且今般毛利大膳父子召連御用濟之上尾張前大納言參府可致旨被申付候由右は前大納言と一同御用有之候付而は早速大樹上坂被仰出候上右躰被申付候は畢竟

敕諚を蔑如ニいたし候次第既ニ違敕ニ而其上先般大樹進發可致旨被仰出候處其後私ニ進發延引之旨觸流候儀は如何樣之事ニ候哉不都合至極且毛利大膳父子は兼而總督ニ任セ所置可有之ニ付更ニ召寄候義ハ不相成先般已來追々上坂被仰出候義ニ付豐後守ニは宸早御用品無之候付速ニ令歸府大樹早速上坂有之樣可申入仍夫々御暇被下候間早々出立可有之候

御請

右御進發延引之儀は大樹ニは更ニ不存事是等之儀は私共之罪ニ而最早長防鎭靜之注進も有之且ハ追々之上洛ニ付關東ニ而殊之外疲弊ニ付ケ樣觸出候段奉恐入候

右殊ニ苦敷御請大聲ニ而申述誠ニ愉快何れも昨廿四日當地發足伯耆守ニハ人數召連浪華ゟ罷越豐後守ニハ東海道旅行罷下申候

二月廿六日

○廿七日御參　内御酒饌御頂戴此御規式重キ御事之由

殊之外成　御機嫌ニ而　歸御被遊候同日越前侯ニも參　内直ニ御暇出

申候付　老君例之御病ひ出　歸御否千賀ゟ御歸國之周旋方御談被遊候

由ニ而同人大込り右節　二條殿下ゟ何歟格別之御沙汰品被爲在候由之

處御不勝手之儀と相見御側向ゟも御洩し無御座前文御酒饌御下候歟菊

桐御紋附御長持貳持貳棹御宿陣ゟ參り右御長持共被下切之由

今上御製

朝な夕な民安かれといのる身の心にかゝる異國の船

戈とりてまもれ宮人九重のみはしの櫻風そよくなり

夷らよ船こき戻せいせの海神の御國としりてありなハ

あしきなやはたあしきなや葦原の頼むかひなき武藏野々原

浮世をも水のまに〳〵流れ行末ハ心もすめる海川

月前虫

むしさへも心ある夜の物かたり月見かてらにいてゝ聞はや

亥三月十一日加茂行幸の時

この春は花も霞も打すてゝ民安かれと思ふはかりそ

同四月八日男山にて

うたてやむ物ならなくに唐衣何いたすらに日を重ねなむ

皇太子御咏

夷等（二ニ異國）を招きし人ももろともに拂ひつくさん神風もかな

睦仁親王六歳の御時

月見れハ雲井をわたる雁金の水にうつりて見ゆるなりけり

あめりかの醜の奴らをいたつらにかへせしときハ涙流るゝ

夷等ハまたも來らハまのあたりきりて拂ふて耻見せましを

皇妹和宮　御下降の時

おしからし君と民との爲なれハ身ハむさしのゝ露ときゆ共

同有栖川宮へ

このたひハえこそ返らし行水の清き心ハ汲てしりてよ

（朱書）土佐高知二十四萬二千石　土州侯松平（朱書）土佐守豐範

唉華の色香に迷ふ心にてつとむる道を常にわするな

容堂侯（朱書）土佐侍從藤原豐信

水の色をよし濁るとも隅田川底の心は汲む人そ知る

加茂川にあたら白浪たゝせしと心せかれて渡る月日か

大宮のありとはかりハ名のミにて思へハ〳〵涙こほるゝ

亥三月衣斐小平の嵐山の花見に

御出と申上る時に

花見んと思ふ心ハあらし山あらしはけしき春の明ほの

三條殿

月と日の清き光りにはちさるハ赤き心の誠なりけり

武士の誠の道の見てしよりやかて吹なん神の風哉

德大寺殿

父の首途に

久留米の神職眞木和泉の娘

梓弓春ハ來にけり武士の花さく世とハなりにける哉

辭世

土藩來原（クルハラ）良藏盛功（朱書）自殺

雲霧を四方に拂ふて消月をよみちの空に早く見まほし

藤田彪（朱書）水戸

みせはやな心のくまの月影も隅田川原の秋の夕はへ

○元治二年丑三月中江戸表所々張紙之寫

一惱（叡カ）戲襟事

一日本之大切成品を夷之無益之品と取替諸色高直ニして四民を困る事
一外夷を近附崇ふ事
一日本之義人を無罪殺事
右四ヶ條兼々禁制
一神州之義勇を殘す事
一國賊外夷を征伐之事
一諸色下直にして救四民事
右三ヶ條兼々執行
一夫天下ハ國之天下成故其國之風を守らざらんハ道にあらず己ハ父カ皮肉を分し身故孝道を守らずんハ道に非ず今の天下ハ日本之國道に違ふ事不遑枚擧國道ニ違ひたるハ是國賊ニ己父之道に違へるハ不孝ニ國賊も不孝も速ニ可誅戮號令衆人之所知也我　日本國仁義禮智信之五常夷國カ正ク國典之定規たるの尊し抑開闢已來（本ノママ）　天朝坐而（マシ〳〵）　日本の國政を司とらしむるゆへ征夷將軍の任を下し給ふ征夷とハ忠孝奸惡之黑白を明白にする事是天下之職たれ共今天下ハ何之職分ニあるぞや是道ニ反復して外夷を近附奸惡を助く忠孝ある者を禽獸カも輕く罪ニ處し普く四民を困しめ

叡襟を安する事不能

神祖之憤發幾くぞや速ニ天下之任を天朝に返し奉られよ我カ日本万國カ小サキといへ共征夷將軍之任タル人無ニシモ非ズ今天下ハ所謂日本の國賊ニ是國賊を誰シモ亡ス事能ズ我爰ニ憤發して天地正氣を負セ共ニ天を不救國賊外夷を戮し神祖皇帝を安し神洲之士風を憚（本ノママ）懣懨然萬國へ輝し四民の困窮を救ヒ神州之回復を希ハント欲ス必シモ其時を期すへし追而日限以高札可申聞者也

但婦女子ハ高札立次第市中逃去可申其時ニ至りて不可逢万死勿論

無謀之征夷ハ可愧（義カ）我ナル故ニ遣ス（本ノマヽ）

月　日

右之條々堅相心得國中婦女子ニ至迄可申傳也

○丑二月十四日入手箱館簡

十月五日御認之尊書相達拜見仕候扨又舊冬鍬ケ崎ゟ申上候後兩度奉書狀差上候處每々行違候と遠察仕候久々ニ而御細書拜見御地京江戸長門抔之珍說承知仕候私脚氣も當夏聊再發魯西亞醫師ニ賴療養當時大丈夫ニ而先々無事冬ゟ航海御用相勤大慶仕候驚入候は間瀨雨君泉行恐入候義ニ御座候中略當節相上乘之者ネモロ著否中風ニ而平臥海陸共過日ゟ私壹人ニ而相勤早朝より龜田ニ出懸候而も短日往返三里之處ニ而船中水主共ハ小生引取を待居每夜九時頃迄ハ調物いたし居候事ニ付大略之御請御宥恕可被下候今便松浦先生ニ向先方ゟ屆給り候飛脚之者江戸ニ登り候付右ニ託し差出申候航海中荒增等松浦ニ向差出候付同人ゟ可差上と奉存候不日入寒猶更御保護專一と奉存候謹言

十二月七日曉認　　池田澂三郎

御兩親樣

御兩兄樣　　謹上

此度ハ御手當澤山之樣ニ候得共相懸りニ離盃其外土產入用等拾貳兩程散し取れば取程入費相嵩申候江戶行之積ニ而離盃いたし見込違ひ相乘と共ニ折々グチを云出し一笑する事ニ御座候

松浦氏ニ向差越候右別紙

當盆后ゟ英國商人「ブリウキストン」名當湊之內新築島ニ而借地いたし鋸蒸氣仕掛木挽丸鋸ニ而巾壹尺長六尺之板瞬息間ニ挽割亦堅ニ鋸數挺幷べ一時ニ數十枚之板を挽割諸人を驚し實ニ輕辨之品ニ而丸鋸堅鋸取扱候者之僅五六人にて挽立候板片付候者拾五六人も有之材木を初重目之

者何れも蒸氣之余力を以引揚右板を支那上海ゟ廻し軍艦入用ニ相成候
由右ニ付材木幾何も買込候付高價之土地別而引上ケ往昔十倍ニも相成
候由右器械英都龍頓ニ而出來價三万八千ドルラル同所ゟ當湊迄運賃六
萬三千ドルラルの由石炭を不用薪鋸屑を用ひ馬力ハ毎ニ三十五位ニ而
手練之上ハ四十馬力位迄昇セ候よし右取扱候英人貳人外和人を雇ひ英
人壹人一日給金食料之外五ドルラルツヽ何程瞬息ニ挽立候而も三年五
年ニハ迚も元代取返し候譯ニ不行屆由右「ブリウキストン」ハ英國士官ニ
而戰場ゟ屢出既年齡五十近ク相成候付士官を辭し諸國遊歷中ニ而長
く此地ニ止り候者ニ無之後ニハ政府ゟ御買入相願候積之由崎陽器械ゟ
ハ余程少き由

△當所調役山崎衡三郎八月十四日曉著直樣出勤東都出立以來仙臺地迄之
問浮浪人千人程所々ニ而屯致居何れも函府ゟ下り候者之由之處仙臺領
ゟハ浪人壹人たり共通行爲致間敷樣政府ゟ御達有之候付嚴重關門を構

へ居候付越後路ゟ廻り候由其餘程之浪人之爲旅中難澁咄中南部家留守
居ゟ領內沼宮內盛岡ゟ十里北之方ゟ八十人山道越浪士躰之者相見候旨ニ而注進有
之候旨屆出然處ゟ新潟湊ゟ入船有之右之咄ニ新潟表ゟ浪人三百人程來
り箱舘ゟ渡海船仕立呉候樣奉行所ゟ願出若御聞屆無之候ハヽ新潟中燒
拂自渡海可致旨申立候由咄も有之旁夫々符合いたし候付卽時ニ箱舘模
寄御固南部津輕松前家ゟ被　仰付入船碇泊前蒸氣船を以乘留ニ相越浮
浪之者有之候得ハ召捕時宜ニ寄切捨候而も不苦旨御達有之十四日夕刻
ゟ之支度ニ而十五日晝比鎭臺蒸氣神速丸ゟ乘船湊內乘廻シ發砲壹貳番
バッテーラゟもホードル筒壹挺ツヽ、ケベール筒貳十挺ツヽ、備付打試有之
警衞掛沖ノ口掛諸術調所掛御武器掛市中取締掛何レも十四日ゟ廿日ま
て少しの休息も無之今以晝夜見廻り入船改甚嚴重故歟浪人躰之者壹人
も渡海不致昨今ハ少々穩ニ相成候得共製藥玉拵等ニ而日々繁用ニ候
△野州邊浪士屯致居候付陸便ニ而御用金御下し方心配ニ付今一艘近々蒸

氣船御買入之積ニ而當時探索中ニ御座候御買上相成候得は私も是非乗組可被　仰付旨御内意も有之候間當年中出府之積御座候御買入不相成候ハヽ箱舘丸ニ鮭積込上乗役測量役兼帶ニ而出府之心組ニ御座候

△前文之通箱舘港模寄嚴重警衛致し候共夷地ニ直ニ著船上陸可致廣大之蝦夷地警衛行屆間敷當時之躰前門を防候而已後門ハいまた警衛不行屆候

△鎭臺ハ當六月十五日龜田（箱舘ヲ北之方凡一里半程）五稜廓御普請出來引移相成申候未石垣石門等ハ不成就ニ而備附之大砲等ハ江戸ヲ御廻し不成候（百廿五挺備附之積）御臺場ハ皆出來ニも可相成積ニ而大砲五挺居付候付直様打試候處地形惡敷候付仕直し之積ニ有之候石門を初石垣等は品川沖御臺場ヲハ余程出來形宜由御座候

右八月中旬認置右已前六月朔日

在住池田濬三郎

一人立在住ニ付壹ヶ年金拾五兩ツヽ被下罷在

當分諸術調所懸り同心代り申渡

右美濃守殿ニ伺之上申渡之入念可相勤

右之通被仰渡難有仕合奉存候右ニ付日渡御手當壹匁ツヽ泊御手當壹匁五分ツヽ薪炭油料一ヶ年七兩ツヽ被下相勤居候處九月四日左之通

（在住諸術調所懸同心代出役）

船中雜用壹ヶ年金二拾兩之割被下筈　池田濬三郎

此度箱舘丸御船ネモロ場所ニ差廻し於同所荷物積入江戸表ニ被差遣間右御船乘組同心代測量役兼相勤べし（相乘定役石渡庄左衛門水主十八人都合廿人乘）

右左衛門尉ニ伺之上申渡之間入念可相勤

右ニ付九月十七日箱舘丸ニ乘組同廿二日拂曉南風ニ乘シ函港解纜當所丸山沖ニ（函湊ヲ五里）至り風凪已刻未十五度之風起正面ニ向颿同廿三日戌刻亜十五度之暴風雨ニ變するニ寄歸湊せんと云もの多し然ニ驗氣管驗温

管之昇降を見るニ暫時ニして好風を得んと諸帆を僅ニして艤る同廿四日正午天氣快晴戌十五度に風位轉す故ニ船路丑廿度に轉し諸帆を開て艒る夫ゟ或艤或漂同廿七日未刻ゴヨマイ瀨戸を航す（此所至て狹き瀨戸にて西之方ニ暗礁東之方小島數多有之甚盡るを不知）同夕クナシリ島投錨此夜辰十度之烈風來船動搖甚しく兩碇之鎖七十尋ツヽニ而繫留しニ彌風波甚敷氣管下り同廿八日正午ニ至り是迄不覺寸尺ニ而一同心痛之處同夜氣管聊ツヽ昇廿九日朝風波靜安慮いたし同午刻クナシリ揚碇同夜ネモロ場所無異著船直樣上陸秋味鮭積入手配等申談候處案外不漁ニ而五百石目積入之積之處二百石目十月廿三日積入漸同廿七日ネモロ開帆之處同夜ゴヨマイ瀨戸厭にて夜之明るを待しニ午風と變し同廿九日逆風之爲ニ轉走する事不能故無余義クナシリ島に碇泊十一月四日拂曉同所揚碇戌風ニ乘して午に艒る夕景ゴヨマイ瀨戸を航す同夜酉之暴風起て浪甚し沖合に流されん事を厭て轉走する此朝クナシリより同時開帆せし江戸ニ而製造豐島形三本檣幷商船壹艘今以行衛不相分候今夜之烈風之爲諸帆破り身命限り一同相働地方を離する事十余里同五日夕景風波靜り子風と變して未廿度に艤る同七日正子比ヱリモ岬を過キ巳半刻西之烈風ニ變し浪高して轉走不走故シヤヱニ沖に泊せんとして同所に至りしニ同所碇泊商船帆八合程風十分持ち高浪之爲碇を揚る事不能故切捨しに高浪の爲に海岸に押付られ忽破船ニ及ふを見て地方ニ添ふて艤夕景ヱリモ岬を過キ戌刻比トカチ沖ニ泊す人命ニ不係といへとも暫時ニ破船ニ及ふ事可憐可恐事ニ御座候同八日ゟ日々逆風之爲碇泊同十九日朝開帆子十五度之風ニ乘して未に向艒る巳半刻ヱリモ岬を過キ船路十度に轉す同廿日寅刻過江山岬を過卯刻日浦ト云所（箱館ゟ西方にて凡七里）西風ニ轉し潮路之爲ニ矢越岬に向艒正午過箱館に向し夕景函府迄僅之所ニ而逆風相成候付廿五里程航海して漸函府著湊いたし候此度ハ荷物積入直樣江戸行之積之處荷不足之爲江戸に相越候而は來三月迄之御手當始として諸雜費不容易御損失相成候付

無據歸湊仕候函湊よりネモロ迄凡海上貳百餘里コヨマイ瀨戸夷地第一之難所ニ御座候右ニ付積荷當所ニ而相拂來早春昆布積入長崎ゟ航海之積ニ而買入方等都而取調中ニ御座候右御用中御手當金一ヶ年廿五兩月割日當り雜用六匁五分ツヽ被下候昨今四十度位之温度ニ而雪解路次甚惡敷短日龜田ゟ日勤毎夜五時過引取難澁不少御遠察可被下候

十二月六日寅刻認

當四日夜四ツ時前箱舘新築島之内出火曉ニ至り鎭火何れも板藏等ニ而住居之者無之昆布千石目程蒸氣木挽材木板類數多其上石炭ゟ火移り只今以て箱舘中煙覆ひ石炭昆布之匂ひ甚し前ニ云ブリウキストン器械所隣り之處一町四面程燒失申候御船御製造所隣ニ而御修覆中之船有之殆心配之處早速鎭火安心仕候

前顯相應之蒸氣船無之候付見合ニ相成當節ニ而も湊内盡(晝カ)夜ハツテーラニ而乘廻し入船改嚴重ニ御座候

○浪徒名逸

踰山越嶺幾艱難　雪徹戎衣凛冽寒
不幸縱令死非命　赤心魂魄著平安

やつかほのしけるいゝ田のあすにさへ君につかへる道ハありけり
八隅しゝわか大君の御年おふるおふ田のまやにひらいくたびつ
木曾山能八丘踏越君賀邊仁草牟須屁(屍カ)行武止楚思不

姓　名　欠

○越前侯御屆

先達而御屆申上候通拙者儀致滯京候樣被　仰出候處昨年來長陣之後と申且留守中國許ゟ常野脫走之浪徒立入騷擾之末敦賀表ゟ人數も差出置人氣致動搖候事故差向難切置政事筋多有之同氏大藏大輔ゟも是非奉願暫時なりとも歸國之上申談取締致度旨申越候付何卒一旦休暇被　仰付候樣尤

公方樣御上坂之節ハ先達而上京可仕旨傳奏衆迄致歎願候處去月廿七日
致參
内候節段々御暇相願候旨趣無據相聞候間願之通暫賜御暇候旨傳　奏飛
鳥井中納言を以被　仰出候依之今朝ゟ國許發途いたし候此段御屆申上
候以上
三月朔日　松平越前守

○加賀侯屆書
中納言儀去月廿六日國許發途可仕候段申上置候處病氣不出來ニ付一兩
日遂保養同廿八日發途仕候間猶又此段御屆可申上旨申付越候以上
三月　加賀中納言内　廣溮五十八郎

○石州津和野侯屆
毛利大膳父子服罪仕候付鎭靜異儀無御座候段御愼督樣仍御達人數拂仕
候處其後長州諸隊之者共暴動仕候付大膳父子愼中之儀ニは候得共不得
止事及追討候旨隣國ゟ爲知候段松平安藝守樣ゟ御通達御座候付早速人
數等手當仕候得共全長州一國限他國ゟ相拘候儀ニは無御座且追々鎭靜
仕候趣相聞候付人數差出候義相扣申候段在所表ゟ申越候此段各樣迄申
上候以上
三月四日　龜井隱岐守内　山崎傳兵衛

○江刕彥根侯屆書
井伊掃部頭義此度參府之節鉄砲百挺爲持可申候兼而御觸も御座候間此
段御屆申上候以上
三月四日　井伊掃部頭内　山本運平

○閣老山城淀侯屆
拙者儀去月廿一日淀出立今日致著府候付可致伺公之處旅中ゟ拘攣其上
寒勢（マヽ）頭痛ニ付此段御屆以使者申達候以上
三月四日　稻葉民部大輔

○三月五日秋元但馬守ゟ御預人之内毛利讃岐小者久藏病氣養生不相叶病死之旨届有之

○會津侯内達

肥後守儀昨子年三拾歳ニ罷成候處永々病氣ニ罷在御警衛筋過失等有之候而は深奉恐入候義ニ御座候間萬一之節陣代等爲相勤度含を以養子願被申上度内存ニ候處兼而之御趣意も有之三拾歳ニ而は難被　仰出候義ニ拜承罷在候へ共前文之次第ニ付不得止事其志願之儀委細昨年十一月中阿部豊後守樣御用人中迄御内慮相伺候義ニ御座候處當年ニ至り候而は最早三拾一才ニ相成候ニ付此後都合次第表向養子願被申上度義ニ御座候間昨年中御内慮相伺候義ハ御取消被成下度此段各樣迄無屹度相伺候以上

三月七日

松平肥後守内
石澤民衛

○豊前小倉侯届書二通

口上之覺

先月廿三日異國蒸氣船一艘上筋ゟ乘下り領海門司之浦沖致入碇候付問聞船差出相糺候處英吉利之由申聞候

一同廿五日長州赤間關ゟ五十石積位之舟弐艘ニ石炭積込右門司浦沖碇泊之異船ニ漕寄石炭積移間もなく右異船同所出帆長州引島ゟ繫船黄昏之比同州南風前ゟ碇泊仕候

一同日夕異國蒸氣船二艘上筋ゟ乘下り領海通船下筋ゟ向乘行候付問聞舟差出候へ共船足早く追付不申尤英吉利國旗相立居申候

一長劦南風前ゟ碇泊之英吉利船同廿七日朝同所出帆下筋ゟ向乘行申候

一同日夕異國船壹艘下筋ゟ渡來私領分楠原村沖ゟ繫船致し候尤佛蘭西國旗相立居申候然處右船ゟ端舟ニ而異人六人日本人壹人同所牧郷（枝カ）大久保と申處ゟ上陸昨子年八月中異人死骸埋葬之場所ゟ罷越致手招候付海岸見廻り之村役人共罷越候處昨年此所ゟ死骸を埋め石塔を建置候處無之

如何致し候哉と相尋候付不存旨相答候處彼是理不盡之儀共申立立腹之躰ニ而墓印ニも候哉長サ五尺程横三尺余も有之候黒塗之木二本船ゟ取寄相立猶不法申募本船ゟ引取申候

一同廿八日夜異國蒸氣船一艘上筋ゟ乘來り長州赤間關ゟ繫船仕候尤問聞船差出候得共他領之義ニ付糺等不仕船印相立不申候ニ付何國之船共相分不申昨三日夕同所出帆長州福原前ゟ入碇仕候

右之通御座候付手當人數等穩便ニ用意仕浦々入念候樣申付置候此段申上候以上

二月四日　　小笠原左京大夫

三月七日出ル

三月七日前達一束ニ小倉侯江戸留守居届書

當正月廿七日佛蘭西國船一艘渡來領海ゟ入碇仕領内楠原村枝郷大久保と申所ゟ異人貳人日本人壹人船子四人上陸昨子年八月中死骸埋葬之場所ゟ罷越致手招候付村役人共之内海岸見廻之者罷越候處此所ゟ死骸を埋石塔を建置候處無之如何いたし候哉と相尋候ニ付不存旨相答候處不存候ハヽ致方無之右死骸ハ蘭人ニ候處先達而下之關ゟ繫船之節罷越見請候處石塔打破有之其段蘭國主將ゟ相達候處佛國主將ゟ賴越我等を差立候付則來著見請候處損し候石塔も無之日本人ハ墓所を輕んし候國ニ候哉と申候付輕んし候義ニは無之旨相答候處殊之外憤怒之躰ニ而墓印ニも候哉長五尺程横三尺餘も有之候

十

如圖十文字之黒塗木貳本本船ゟ取寄同所ゟ相立是を破候得は大ニ失禮ニ而大罪ニ相成候間主將不致勘辨候ハヽ長州之如く敵國ニ相成候間向後入念候樣申聞候ニ付右之趣村役人ゟ寂寄出張之家來共迄相達候ニ付早速家來共罷越候得共寂早間ニ合不申本船引取申候右異人ゟ致應對候者ハ村役人共之儀ニ付不行届之儀有之候得共元來開港之場所に無之事ニ付埋葬等之儀は前以一應懸合熟談之上ニ而可取計處無其義自儘ニ埋葬仕候筋ハ有之間敷勿論其砌ハ長州と戰爭開ニ

付先其儘差置遣候義ニ御座候尤時宜次第ニ而は垣等結廻し番人等付置候樣可仕候得共懸隔候場所万端行屆兼殊ニ領内人氣激し心配仕候依之可相成義ニ候ハヽ何卒他方ニ改葬被仰付被下置候樣仕度左も無之候ハヽ渠ガ取建候品々如何樣共破壞仕候共故障申間敷旨聢と御諭被下候歟兩樣之內御聞屆被下候樣仕度奉存候此段奉願候樣左京大夫申付越候以上

三月七日　小笠原左京大夫家來　宇佐美新

先寫氏案ニ破壞ハ尤承知致間敷改葬も乙甲ニ付和蘭國ガ永々之地代地主ニ差出し且其所之番非人ニ附屆致し賴置候外無之と被存候

○乙丑春

播州ガ以西之國ガ伊勢ニ參宮する者道中にてうたふうた（西國には流行の諺なりとそ）

「死ネヤ死ネ五十年の命何そいとわん大君の爲ヲジヤレソヲジヤヨ（ツメルソレヤウソナイゾヨ）」

此外いろ〳〵有ども此歌殊ニ耳たちて聞へし故暗記したりヲシヤレ——は何れの歌にも後につける

○或人ガ之書狀中ニ（木曾詰之者道中ガ著迄之萬事ヲ記したるうちなり）授舊冬浪士通行之節同輩之內ニ而貳人不都合之次第有之候哉被斬殺中津川落合雨宿ニ是を葬り墓所有之中津川之墓ニは少し廻り道ニ付得立寄不申候落合の通り道ニ有之候付見物いたし候處墓所ニ熊谷大明神抔と色々相認候幟り數本立有之近邊假茶屋六軒相立賑々敷不思義なる事ニ御座候一寸申上候

○扨當地ハ殊之外之寒國ニ而三四日以前迄ハ山々ニ雪積り居り候得共今日ニ而ハ大分消申候著之砌ハ朝焚候飯晩ニハカン〳〵ニイテ付居候躰ニ而朝ガ晩迄火燵ニ這入詰居申候しかし三四日已前ガハ少々暖和を催し申候云々

三月十一日

（原註）二月廿五日尾府發足同廿九日著ト云

道中境峠ゟハ殊之外之雪ニ而所ニよりてハ三尺程積り居申候

○益田右衞門介辭世

飛鳥川かはるならひや世の中の瀨にたつ身ともなりにけるかな

福原越後辭世

よしやよし世を去るとても臣(ヲミ)として君の御爲に身をつくすなり

國司信濃ハ今樣をうたひて死すト云

たゝかハぬ先にそあくるかちときハやかてや君の萬代の春

○

公　卿

日野大納言

九條大納言

飛鳥井中納言

中院中納言

野宮中納言

野尻宰相中將

清水谷宰相中將

今城宰相中將

中御門右相辨宰相

殿上人

難波少將

植松少將

樋口右馬權頭

石野治部少輔

慈光寺大膳權大夫

長谷美濃權介

中園近江權介

高松刑部少輔

右之通御座候

護送御人數

割

八十

北小路極蔀

細川源藏人

臨時幣使

四辻中將

禁裏御所御贈位使

小倉中將

著座門跡

梶井宮

奉行職事

坊城左少辨

日野大納言

九條大納言

飛鳥井中納言

中院中納言

野宮中納言

町尻宰相中將

清水谷宰相中將

中御門宰相中將

今城宰相中將

九　人

大御番頭　壹人

同　組　十　人

御先手物頭　壹人

同組同心　廿人
梶井宮
右護送
同　斷
臨時幣使初堂上
殿上人　拾三人
右護送
大御番頭　壹人
同　組六人ツヽ
御先手物頭壹人
同組同心廿人
（朱書）
大（い組）御番頭　壹人

右之通
（朱書）
加納
四里八丁
鵜沼

同組　廿五人
御先手物頭　壹人
同組同心
（朱書）
同
大御番組與頭貳人
同　組　廿五人
御先手物頭　壹人
同組同心

下ケ札
御參向之御方御休泊割未相分候付御人數配相替儀も可有事
御晝休ニ而代り合護送相勤候義隊長等勘辨之事

二リ
太田
二リ
伏見

二リ二丁
細久手
一リ半
大湫

三リ半 大湫
二リ半 中津川

一リ 落合
一リ廿五丁 馬籠

（朱書）ろ組 大御番頭 壹 人
同 組廿五人
御先手物頭 壹 人
同組同心

（朱書）同 大御番組與頭貳人
同 組廿五人
御先手物頭 壹 人
同組同心

（朱書）同 大御番頭格 壹 人

二リ 妻籠
一リ半 三戸野
二リ半 野尻
一リ廿四丁 須原

三リ九丁 上松
二リ半 福島

御目見之輩廿五人
御先手物頭 壹 人
同組同心

（朱書）は組 大御番組與頭貳人
同 組廿五人
御先手物頭 壹 人
同組同心

山村甚兵衛家來人數

一リ半　宮越
二リ　
一リ半　奈良井

贄川
二リ
本山

一御目付三人幷支配向之儀は程能人數引分宿陣等取計候事

（朱書）三月十九日曉發足鵜沼ゟ本山宿迄梶井宮護送四月二日護送

（朱書）同　大御番頭壹人
同　組廿五人
御先手物頭　壹人
同組同心

（朱書）三月廿六日曉發足木曾路ゟ四月六日夕

御先手物頭　小見山德之進
大御番頭四番　海保三郎平
高木作十郎
同與頭
御先手物頭　同組
星野七右衛門
大御番頭六番　山田又次郎
山村多門
同與頭
御先手物頭　同組
太田卯平治
石原甚兵衛

（五行朱書）三月廿六日曉作十郎ト同し發足御用濟之上先祖菩提所與禪寺ゟ參詣本家山村甚兵衛ゟ立寄所用濟之上四月十六日夕歸著

但附屬役々組等ハ尤先達而歸著

以上

（朱書）三月廿六日曉鵜沼宿ゟ大御番頭格代として發足四月六日歸著

東照宮貳百五拾回

御神忌ニ付日光ゟ參向之公家衆等木曾路通行ニ付鵜沼宿ゟ御嶽宿迄護送之人數割

（二行書朱）隊長初御役名之儀は公家衆初公役衆等ゟ尋之節肩書之通答振之筈被仰渡

御馬廻格

御用人格御勘定奉行良次郎摠領　大御番頭　野崎一學

御作事奉行九郎右衛門摠領　御先手物頭　都筑儀十郎

御右筆組頭格彦八郎養子　大御番組與頭　小池熊五郎

御先手物頭新八郎摠領　同　小笠原喜十郎

陣場奉行

同　村井辰三郎（一組締方）

同　土屋長太郎

（二行書）御馬廻頭格　野崎一學

御目見之輩廿五人　御先手物頭

寄合彌九郎摠領

新御番八太郎養子

（以下二行朱書）左之輩廿五人之筈候處出立前ニ至俄ニ三人相減し廿貳人ニ而相勤候事

御勘定奉行平太夫摠領　使番　堀亥三郎

壽操院樣御用役文次郎摠領　兵糧奉行　矢部五郎吉

御廣敷詰治兵衛摠領

御馬廻組八十郎摠領

御廣敷物頭御小納戸頭取兼七太夫摠領

御徒頭喜內摠領

中奥御小性熊次郎摠領

御書院番格御廣敷詰孫助三男

御手筒頭格御小性頭取武兵衛摠領

大御番組

同　水野篤之助

同　星野正平

同　佐久間治三郎

同　山田文之助

同　稻葉助十郎

同　眞鍋彌十郎

同　大島賢藏

同　森本錠吉

同　松井五郎助

御小性頭取錵次郎叔父
表御番與力頭孫太郎弟
御弓役庄九郎摠領
御馬廻與頭並與右衛門四男
御書院番八太夫摠領
同錵太夫摠領
寄合組條右衛門摠領
表御番頭取理兵衛四男
御納戸格文次右衛門養子
寄合組丹左衛門摠領
大筒役性九郎弟
御側物頭格明倫堂督學八助三男

同 堀田瀧三郎
同 赤林郁三郎
同 山本敬次郎
同 鈴木錵助
同 岩田健次郎
同 澤田鐵平
同 深澤金一郎
同 深津摠四郎
同 波邊乙二郎
同 河村久四郎
同 鈴木錵太郎
同 阿部熊吉
同 寺尾龜彌

一左之書付鵜沼本陣櫻井辰左衛門ゟ差出候事

三月廿六日京都發與

一清水谷宰相中將殿
町尻殿
植松殿
坊城殿
外ニ下官拾壹人

公儀御警衛人數

新庄美作守　遠山內膳
御徒目付　小澤傳兵衛　御小人目付　鈴木錵三郎　同　中島莊一郎

右廿九日鵜沼通行

同廿九日立

一飛鳥井中納言殿

難波殿
中園殿
慈光寺殿

外ニ下官四人

公義警衛人數

巨勢大隅守　大久保隼人
御日付 布施孫兵衛　御徒目付 大塚久四郎
御小人目付 三輪嘉兵衛

右四月朔日鵜沼通行
同廿八日立

一中御門右大辨宰相殿

今城殿
四辻殿
樋口殿

外ニ下官五人

今田貞之介　鈴木伊兵衛　楠祐之介
田中鎌藏　萩原時藏

右四月二日鵜沼通行
同廿九日立

一竹屋前宰相殿

小倉殿
石野治部少輔殿
高松左兵衛佐殿

外ニ下官十三人

中坊陽之介　本見長門守
御徒目付 山下新太郎　御小人目付 壹人

右四月四日鵜沼通行

四月朔日立

一大炊御門右大將殿

中御門中將殿
御書院番頭 有馬阿波守 御目付 渡邊爲三郎

同日立

一長谷殿

北小路殿

細川殿
御目付 加藤宗三郎 御徒目付 菅沼鉚之助 御小人目付 正木錬藏

右四月四日鵜沼通行

護送方勤割行烈左之通
（朱書）三月廿九日鵜沼通行之公家衆等行列書四月朔日より同四日迄日々通行之公家衆等行列併護送方之儀大法似寄候事ニ付別段ニ相記し置不申候事

杖突壹人　同心九人

同心組頭　玉藥箱　御先手物頭　都筑儀十郎馬上

杖突壹人　同心九人　侍

鎗　杖突壹人　公役同　御箱

沓籠　公役　御歌書櫃　御裝束櫃

床机　杖突壹人　公役同　御箱

徒同　侍　公役

御長刀　清水谷宰相中將殿　御傘　公役　清水谷殿御內　御家來衆數多

徒同　侍　公役

公役　御箱　徒　侍

公役　御歌書櫃　御裝束櫃　御長刀　徒　町尻殿

公役　御箱　徒　侍

公役同

御傘　町尻殿御内（御家來衆）　公役　御歌書櫃　御裝束櫃
公役同

御箱　徒侍　侍　公役　同
御長刀　徒　植松殿　御傘　植松殿（御家來衆）　公役
御箱　徒侍　侍　公役　同

御箱　徒侍　侍
御歌書櫃　御裝束櫃　御長刀　徒　坊城殿　御傘
御箱　徒侍　侍

坊城殿御内（御家來衆）　公役　公役　公義御警衛　新庄美作守　同勢　同　遠山内膳
公役

同勢　公義御徒目付　小澤傳兵衛　鎗　纏　鎗　大御番組與頭馬上

侍　草履取　纏　草履取
、締役壹人　騎士拾貳人
沓籠合羽籠　使番壹人　馬印
兵粮奉行壹人　騎士拾貳人

手筒　徒侍　侍　鎗
玉藥箱　具足櫃　野崎一學馬上　沓籠　駕籠
手筒　徒侍　侍　床机

合羽籠　兩掛同同　一學用達　平野　久藏　鑓
侍

右行列ハ見聞致し候事ニ付間違も可有之日々護送振相替儀無之本文之通
但四月四日ハ　例幣使之節ハ御三方ニ人數割合致護送候事
加納永井肥前守護送之隊長

瀧　半左衞門　加々爪忠右衛門
外ニ騎士八人程鋭砲三拾挺程

○三月廿七日出江戸來簡

廿五日ハ強風雨ニ御座候處駒場おゐて
上樣調錬
御覽被爲在十六大隊ニ大砲隊六隊砲數ハホート四十八挺ニ而御座候ニ
列打之比雷鳴之如く
御屋形迄響申候其砲聲の鳴動中時計を以計り申候處七ミニユート間の
中一聲ニ相聞申候
公邊之御勢ひニハ恐入申候委敷事ハ後音可申上候

三月廿七日

御小納戸頭取　御小納戸詰組頭格御小納戸詰役懸り

○四月十日林藤左衞門　蒲五兵衛江戶ゟ早追ニ而著之趣ハ長州表之儀未

全鎭靜共相見不申右ニ付大小鑑察被差遣候得共右
御主意之趣ニ萬一違背仕候ハヽ速ニ
御進發可被遊然處先般ニ而諸藩は疲弊ニ及候間今般ハ
將軍家御一手ニ而御征伐可被遊とのの
上意之由老中ゟ追々御留被申上候得共更ニ御承引無之
玄同樣ニは是非御供御願　御進發前長州表ハ御發向被爲在候樣ニとの
御事ニ而紀州樣も同樣之由尤
前樣ニも士氣御養中ニハ候得共御願相成候而不苦と申事右早速御否可
有之旨阿部豐州ゟ兩人ニ直談相成候との事
○四月十八日朝御用人五味織江殿江戶表ゟ早追ニ而著四日振ト云　昨十七日著可
相成之處御祭禮ニ付鳴海ニ而一泊今朝著ト云

○四月十八日左之通

公義ゟ之御觸

此度
御進發被
仰出有之候處
御神忌御法會濟
御發途も可被遊
思召ニ候。此度之義ハ御軍事之儀ニ付御武備之外は先規ニ不抱(拘カ)格別ニ
御省略被爲在御手輕ニ
御發途可被遊
思召ニ候間御供之面々ニも實備專一ニ相心得聊ニ而も虛飾ケ間敷義
無之樣可致旨被
仰出候

四　月

○四月廿八日左之通御觸

京都所司代松平越中守殿ゟ在京御用達役ゟ被相渡候別紙書付壹通相渡
候右書付之趣向々ゟ可被相觸候在京之輩ゟは爲相觸候

四　月

右之通石見守殿被仰渡候付相達候

毛利大膳父子
御征伐之儀先般塚原但馬守御手洗幹一郎を以被
仰出候
御趣意相背候ハヽ急速
御進發可被遊旨先達而被
仰出候處いまた右之模樣は不相分候得共不容易企有之趣ニ相聞更ニ悔
悟之躰も無之且御所ゟ被
仰出候趣も有之旁
御征伐被遊旨被

仰出候仍之五月十六日
御進發被遊候旨
右之通被
仰出候

四　月

○閣老伯耆守殿ゟ御渡之書付貳通

大樹上落之儀老中兩人ゟ
御沙汰有之候通外夷大患長防處置之重典危急之世態
皇國治亂之境別而被惱
宸襟候將今般毛利大膳父子實美以下呼下之命有之不穩之勢此上相當之
處置を失ひ變動を釀し候而は内外不可救之勢顯然ニ而暫閣諸大名參勤
妻子出府之儀ニおゐてハ昨春褒
敕之次第も有之候間去文久二年之令ニ復し猶其末

大樹上洛之上結局永世不朽之國是熟評被聞召度候間何分ニも迅速發途
被安
宸襟候樣過日老中共參
內之節右等之段々委細可有
御沙汰處無其義重而被
仰出候事

三　月

水戸中言納家政向不取締ニ付愼申付候哉ニ相聞
至當之儀ニ被
思食候猶
叡慮之御次第も可有之候間水戸家之儀は經奏聞所置可有樣
御沙汰候事

右之通三月廿三日松平伯耆守ゟ被

仰出候事
(二行朱書)
先寫氏案ニ又々御委任之廉崩レ候樣相見何とやらん万端不穩樣
被存候

○四月四日朝到著一文字便
一三月廿九日布衣以上之輩一役壹人ッヽ席々おゐて御老中列座美濃守殿
演達有之候書付
先達而
御上坂之儀被
仰出も有之候處方今長防之形勢全鎭靜共不相聞旣激徒再發之趣も有
之被於京師候而も深被爲惱
宸襟被
仰進候儀も有之且先達而塚本但馬守御手洗幹一郎被差遣候御趣意若
、相背候ハヽ急速

御進發被遊候間御日限被
仰出候節ハ聊御差支無之樣可致旨被
仰出候
右御上坂被
仰出と申ハ三月十八日之事ニ而則左之通
長防鎭靜ニ及候付此上
御進發は不被遊時宜ニ寄猶被
仰出候儀も可有之旨先般被
仰出候處京師ゟ被
仰出候義も有之候付此度
御上坂之儀被
仰出候然處いまた長防其外御所置も有之ニ付而ハ
御發途暫御見合被成候時宜ニ寄速ニ

御發途可被
仰出候義も可有之候間御不都之儀無之樣可致旨被
仰出候

三月

○二月廿六日出京ゟ申來
一阿部侯急々御歸ニ相成直城（ママ）、御上と申事
公方樣御上洛御催促と被存候内實ハ甚不穩事と被存（ママ）候
一御老中阿部侯御歸ニ相成候由
御所之方御不首尾之樣ニと噂仕候如何可有之也

○二月廿四日出江戸表ゟ
水府公も未御愼之容子之夫ニ御嫡北越ゟ御出進も可笑也
一長州も正月六日過激派二千人程船路ゟ萩ゟ夜討萩勢敗北之趣五人之公家は奪取山口城ゟ楯籠十四日（日カ）嫡長門人數を率（率カ）ひ同所へ押寄十五人大戰

ニ及ひ萩勢討勝五人之公卿も取返シ候由小倉侯ゟ御屆出申候長も同士
討滅亡之兆之

○三月廿五日京都御指立一文字便御内書曰
前大納言樣御歸國御暇之儀比日一印之通
朝廷ゟ御願被遊候處去ル廿二日傳
奏野宮中納言殿ゟ呼出有之候付御手筒格中奥御小性水谷助六御指出
相成候處
御歸國御暇之儀今暫御見合相成候樣雜掌を以申聞有之候趣等二印之
通申達候然處公方樣御上坂之儀被
仰出候趣等
公邊ゟ御達有之候付猶又三印之通
朝廷ゟ御願相成候處四印之通今日被
仰出候事

三月廿五日

寫

一謹而奉言上候先般蒙征長之大任候處因
御威靈早速及鎭靜其段
奏聞仕候處就夫大樹更上坂被
仰出其節　御用も被爲
在候付臣慶勝儀被
召留滯在仕候然處右上坂迄聊餘間も可有之と奉存候付暫時之內歸國
之
御暇被下置候樣仕度三ヶ年來多分在國不仕國務も多々差湊國力疲弊
ハ申迄も無之且昨秋以來之征役人氣も倦怠仕候間一先右等之條々一
洗仕度
御用之節ニ至候ハヽ尤急卒上京可仕候何卒右之趣早行
御許容被成下候樣仕度奉懇願候誠恐誠惶頓首敬白

尾張前　大納言

三　月

寫

二私儀傳
奏野宮中納言殿ゟ罷出申候處
御歸國御暇御願之義
上ニも御六理不成
思召候得共先達而阿部豐後守ゟ
御沙汰之趣も御庭候處未何等之儀も不申上
幕府ゟも何等御答無御座候就而は急使を以
御催促被爲在候事故其內ニは申參候付今暫之內御見合相成候樣雜掌
木下右兵衛少尉を以被申聞別紙御書付御返シ相成申候仍之申達候

御手筒頭格

三月十二日

寫

三謹而奉言上候大樹上坂餘間も可有之ニ付暫時之內歸國之御暇被下置候樣奉願候處先達而阿部豐後守ゟ御沙汰之趣幕府ゟ何等御答不申上候付今暫之內見合候樣可仕旨奉謹畏候然處大樹上洛之筈相決發途之義は暫見合候趣等關東ゟ申越今朝承知仕候就而は寔前願之趣何卒早行御許容被成下一先御暇被下置候樣仕度只管奉懇願候 臣慶勝誠恐誠惶頓首敬白

三月廿三日

寫

四先般來被召留候

中奥小性　水谷助六

尾張前大納言

御用中ニ付歎願之儀難被及

御沙汰筋候得共去秋征長以來永々出國之中ニも候間暫於國許養士氣大樹上坂已前早々上京可有之猶其上

御用濟ニ而御暇可賜候事

但何時可被　召登哉も難量ニ付兼而用意可有之事

三月

○長防御征伐

御進發ニ付行軍爲　御覽四月廿一日駒場ゟ御成御供之次第大概拜見人覺書

御先拂　歩兵隊三組　四千人程

御徒二人ヅヽ　四列ニ立一小隊一組ニ差圖役六人ヅヽ、

三度　ミニイ隊一組ニ歩兵頭壹騎ヅヽ、

大筒八挺　御徒一組
大筒壹挺壹車　二列ニ立各手鑓頭一騎
彈藥壹車　壹組廿五人與頭
右二輛を馬壹疋ニテ牽

大御馬印　御徒一組　御籏十流　御具足二釣
扇形地紙
無地金　前同斷

御馬印　御徒一組　御小性組一組　頭一騎
吐月形　二列何れも歩行得物を持
惣銀　前同斷　家來持高ニ應し銕砲手鑓持

御持組一組　頭壹騎　新番一組　頭壹騎
二列　二列侍壹人ツヽ銕砲爲持
自身ハ手鑓

歩行ニ而四列壹人置ニ手鑓
御側近キ故か供人なし

騎馬　同　同
騎馬　騎馬　同　同　御馬廻り御供
騎馬　御　騎馬　同　同　歩行多人數　御箱　御簑箱
騎馬　同　同

御鑓五筋　御乘替　馬貳疋　御次馬廿疋
御目付　五騎
御使番　御徒一組　歩兵三百人程　御跡揔同勢
此外立場不定　頭壹騎其外
兩役多し　前ニ同し

御供列之外御先勤役々御番士騎兵隊歩兵隊共當曉七時比ゟ御差懸り
朝五半時比迄引もきらす續く何れも陣羽織ハ勿論小具足も有

○御行軍列

○騎馬兵三拾隊

同頭貴志大隅守　同頭並山角磯之丞

○御持小筒三小隊大砲守護兵之

同頭大平鐐次郎

○大砲一座ホート八挺火藥車附馬ニ而曳

歩兵頭河野伊豫守　同戸田肥後守

○歩兵一大隊

同頭並德本鋼太郎

○歩兵一大隊

御籏奉行齋藤佐渡守

○御紋附御籏八流

○御先手佐野鎖次郎組共　大御番頭米倉丹後守組共

○御先手藤澤讃岐守組共　大御番頭齋藤攝津守組共

○御先手水谷彌之助組共　御書院番頭本多日向守組共

○御先手大久保與三郎組共　御書院番頭太田筑前守組共

○千人頭貳騎

銃隊一大隊　八王子千人同心之

千人頭壹騎

○御鎗奉行花房近江守

○千人組　虎之皮御鎗五拾筋

御鎗奉行仙石播磨守

○講武所奉行赤松左衞門尉

講武所砲術師範役

大砲一座　前同斷
同師範役
銃隊一大隊
○講武所奉行遠藤但馬守
中奥御小性　蜷川左衞門尉　久貝相模守　土屋伊賀守　岡部伊賀守
水野河內守　久永出羽守　牧野伊豫守　松平伊勢守　關越前守
○中奥御番　大澤主馬　山下中務　筒井次左衞門　森宗兵衞　加藤右近　西尾主稅助
○御先手　德山五兵衞　組共　加藤鉞之助　組共　皆白御簱十二流
○御旗奉行岩瀨壹岐守　組共
○御先手本間彈正　組共　上野七太夫　組共
○御持筒頭松平信濃守
御持小筒組三小隊　大砲守護

大砲一座　前同斷
大砲組之頭成瀨但馬守
步兵奉行　小出播磨守
步兵頭　富永相模守
○陸軍奉行　竹中遠江守
同　並　溝口伊勢守
步兵一大隊
○大御馬印□金之扇
御徒頭　平岡鍾之助　組共　中條金之助　組共
御先馬　貳足
御具足
○新番頭　須田久左衞門　組共　同　勝田左京　組共
小御馬印銀之八日月

御貝　御太皷

方色御旗十六流

○御持之頭　水野主膳 組共　曾我主水 組共

○小人頭　余語余八郎 組共　稲葉清次郎 組共

○講武所鎗劔師範弐騎

同鎗劔方　合五百人計

御同朋頭　御同朋　御老中　若年寄

御側衆　奥詰鎗劔方　御小納戸　御小性

御馬上金之御笠御陣羽織伊賀袴

御小性　御小納戸　奥詰鎗劔方　御手道具　御持筒　奥御祐筆組頭

奥御右筆　表御祐筆　御笠　御杖　御床机　御數寄屋坊主　御茶辨當

御水筆筒　御丸辨當　御籠駕者之頭　御鎗五本　御簑箱

御筆筒　御野長持　御馬方　御馬預御馬弐足

御鉄砲方　井上左太夫 組共　田付四郎兵衛 組共

御徒頭　松平式部少輔 組共　川村清兵衛 組共

御小性組番頭　島津伊豫守 組共　井上志摩守 組共

歩兵頭　森川莊二郎　都筑鎌太郎

歩兵一大隊

惣同勢　御徒押　御小人押

御書院番頭　八木但馬守 組共　柴田越前守 組共

御小性組番頭　室賀美作守 同　酒井安房守 同

新番頭　岡部備後守 同　中川備中守 同

御持頭　松平侶之丞 同　朽木大和守 同

御先手　三枝左兵衛 同　戸田寛十郎 同　田付主計 同

小十人頭　桑山次郎八 同　諏訪庄左衛門 同

御徒頭　與津勘左衛門 同　蜷川邦之助 同　本多隼之助 同　朝比奈金

八郎 同
御書院番頭　永野伊勢守 同
御小性組番頭　松平河内守 同
御徒頭　中島平四郎 同　石川左内 同
御持頭　天野陽一
御持小筒組三小隊
大砲組之頭　高尾摠十郎
大砲一座 前同斷
歩兵頭　久世下野守　平尾四郎兵衛
歩兵一大隊
歩兵頭並　深澤彌左衛門
歩兵一大隊半
摠計十六隊

御使番壹隊ニ付凡四騎ツヽ
御目付貳騎ツヽ
右は當月三日之御行列也則
御進發御供之面々之由

五月

○今般細川家老ゟ願之趣

今般
御進發被
仰出御座候處諸侯御供之儀は何等被
仰出無御座候御主意之程は不奉辨候得共私共主家之儀今度御供不被
仰付候而は後世之瑕瑾ニ相成甚殘念奉存候右之趣國許にも申遣度候
處其日間も無之候付何卒此表詰合之人數を以
御先鉾之御供相勤度奉願候由之處

上様ニも御滿足ニ被　思召御聞届被
仰出候由愉快至極ニ奉存候
一上杉家も同様之評判ニ御座候

五月七日

○今度
御進發之節尾張殿城内ニ
御泊被遊候ハヽ、家老共
御目見被
仰付成瀬隼人正儀ハ家柄ニ付壹人立
御目見
上意御座候様致度候宜御指圖頼被存候

五月
覺

書面家老共
御目見之儀ハ其節ニ至り可相達候成瀬隼人正
御目見之儀ハ難被及
御沙汰候
右之趣可申越候事

（朱書）伊勢御警衛三月十三日發足大御番頭九番津川伴之丞□皷段被相詰

○志州ゟ伊勢御警衛尾州陣ニ申來
一筆啓上仕候然ハ昨廿日夕七ツ時比無印蒸氣船壹艘志州南張村前海ニ
入津候付兼而申付置候通村役人とも速ニ船中ニ罷越相尋候處異人のミ
乘組居言語不通候得共段々相尋候處英吉利と申義相分候由尚又何れニ
參り候哉相尋候處横濱と申候由右丈ハ相分候得共餘ハ不通のよし船
長サ凡三拾間程人數ハ難見立候共多分相見候旨昨夜子之刻過同村より
注進申出候仍之不相（ママ）敢爲取糺其筋役人共被差出猶引續壹之出固（手カ）人數宸
寄村方ニ被差出候委細之儀ハ取糺之上出役之者ゟ可申越筈候付否相分

次第御案内可得貴意候得共先此段不取敢爲御心得得貴意度如此御座候
恐々謹言

四月廿一日　　稻垣主馬

御日付(肩書朱書)
飯沼紀右衞門樣

追啓本文南張村ゟ注進後志州御座村ゟ申出候ハ昨廿日日暮比異人十六七人小筒持參尤犬躰之者兩疋連同村地先に致上陸小筒打放候義見請候段不取敢同村ゟ今曉申出候此段も爲御承知得貴意候以上

○伊勢宿陣之人ゟ尾州へ申來(大御番組附屬打方之人ト云)常ニは御無沙汰云々右書付之趣稻垣ゟ當廿一日ニ申越候間寫壹通差出申候右樣之事は勢州ニは無之事と存居候處案外仕候與頭之咄ニは一之手貳之手三之手迄藤堂抔はく り出し候趣ニ御座候其よし隊長に申越有之候趣承り申候

兩宮御守衞之儀ニ付先々五六人ツヽと磯邊ゟ參り候筈今日極り申候其外ハ御案内之通とんと日々ひまニは込入申候云々

四月廿二日

(一行朱書)
慶應元年乙丑四月廿九日東本願寺門跡父子尾府下懸所ニ到著從者宿所

御宿割

本町通橋町
下間宮內卿殿　龜屋小左衞門
粟津太進殿　龜屋小左衞門
淺井帶刀殿　日置村(伊勢山田)加藤三右衞門
石原駿河殿　橋町吉野屋甚九郎
森川左仲殿　廿二日會所
松井外記　知田郡會所
川部那左近　御茶所廿四日講會所
橋本平學　二日講會所
磯部主馬　三州會所
長井越後　丹羽郡會所

尾崎杢之尉
横田縫殿
藤井采男
川那部登
花之間御近習衆
北御方御近習衆
中奥御小性衆
大廣間侍衆
御堂僧
集會所御役僧
出納所
御勘定方
御荷物方

海西郡會所
葉栗郡會所
手代町中川九兵衛
中島郡中元會所
右同所
海東郡會所
廿五日講會所
御花講會所
五日講會所
西愛知郡會所
御學寮
右同所

御膳所
御祐筆方書記方
御總列所方
御宿割方
御青士
御茶道
小奏者
御厩
七人組
御中間
鎗頭組
宰領方
御輿之者

八日講會所
十六日請會所（朱書）張紙有テ所ナシ
古渡善正寺
右同寺
古渡美濃屋新兵衛
十二日講會所
東愛知郡會所
廿八日講會所
熱田十二日講會所
御寶藏東之方新建
日置敬圓寺
西御藏

壹番　御手廻り
貳番　小道具
三番　四番　帶刀
下部

久野出羽介殿
大野土佐介殿
中村主殿殿
御供御講中
以上

右同寺

御庭内　假健

美濃會所
池田屋九兵衛
春日井郡會所
茶屋町丸屋
京坂講中

丗四月

（朱書）此記懸所外門ノ北ノ塀ニ貼出タルヲ寫ス

○四月廿六日　御用列以上幷三奉行ゟ被　仰出候趣方今長防之形勢全鎭靜共不相聞候ニ付

御神忌御法會濟

御進發も可被遊旨被　仰出候依之

御先手御慰督被

仰出候間各別被盡

御忠勤候樣ニと之

上意ニ候旨

玄同樣ゟ被

仰出且別紙之趣

御同所樣ゟ申上候樣松平伯耆守殿ゟ演說被申聞及言上候就夫右

台命之趣

御請可被　仰上哉又は

御辭退可被遊哉いつれニ相或

御爲可然哉見込之趣忌諱を不憚書付ニ取調封物を以兩三日中ニ可被

申上候事

德川玄同殿

方今長防之形勢全鎭靜共不相聞候ニ付御神忌御法會濟

御進發も可被遊旨被

仰出候依之玄同殿ニは御先手摠督被

仰出候間格別被盡忠勤候樣ニと之

上意候

毛利大膳父子　御征伐ニ付而は先達而前大納言殿諸藩討手之摠督被

仰付候處今般之儀は深キ

思召之御旨も被爲

在御先手摠督玄同殿ゟ被

仰出候尤御病氣之段は兼而御承知被爲在候得共格別御勉强御出張被

在候樣被仰出候此段玄同殿ゟ可被申越候事

○乙丑二月　京師ゟ被仰出之寫

御詰問

一昨秋以來大樹進發之儀御沙汰之上豐後守再度上京時勢心得居盡力致し

候儀ニ可有之尤於關東無餘義事實ニ候共海內安危ニ拘り候機會

朝命之所追々延引之段不都合之次第ニ候事

一防長之儀此上何樣之取計ニ候哉定而見込可有之品ニ寄後害難測者歟今

般屹度被安

叡慮候樣所置方巨細被申上候事

一攝海外患之儀　御委任之節譯而御沙汰之趣も有之候處其後一應之　言

上無之實備之儀は急速難整事ニ可有之候得共猶此度模様柄篤と可被申上候事

一國家之大義は伺朝意候筈御請有之諸藩之所置ニ付而は宸翰御沙汰被成候義ニ候處復古之觸渡有之由右次第柄情實具ニ可被申上候事

一常野之浪徒多人數近畿ニ迫り候儀右樣之形勢關東取締如何之事ニ候哉と被　思召候且諸藩於入京可伺天氣之處無其儀及退去之儀旁不都合之次第不少後來之制度見込可被申上候事

一前條之外摠而朝廷之御趣意徹底於不致は次序不相立其時々轉變ニ隨ひ詰り幕府初諸藩困弊萬民艱難御國體敗基被惱叡慮候儀ニ付實地之基本關東之見込可有言上事

二月

○二月廿二日　御所より被　仰出候由

大樹上坂之儀每々被仰出候へ共未發途ニ不至由年々之儀實ニ不容易筋ニは候得共長防篤と鎭定ニも不及由且又山海遠隔彼是物議貫徹不致次第も有之哉昨年歸府後諸事淹滯之儀も不少自ら人心不和之基を開キ不被安宸襟候間何分ニも早々發途御一和之良圖を被運度思召候事

但上坂と被仰出候へ共先は上洛之方可然候事

右書付白川侯參　內之節御渡之由ニ而關東ニ三月八日持下之由

○傳奏ゟ關東ニ被　仰出之書付

大樹上洛之儀老中兩人ニ御沙汰有之候通外夷大患長防所置之重典危急之世體

皇國治亂之境別而被惱

宸襟候將今般毛利大膳父子出府實美以下呼下し命有之不穩之勢此上相
當之所置を失ひ變動を釀し候而は内外不可救之勢顯然ニ候暫閣諸大名
參勤妻子出府之儀ニおゐてハ昨春褒　勅之次第も有之候間去ル文久二
年之令ニ復シ猶其末大樹上洛之上結局永世不朽之國是熟評被
聞召度旨何分ニも迅速發途被安
宸襟候樣可致過日老中參
內之節右之條々委細可有
御沙汰之處其儀無之重而被
仰出候事

三月

右書付松平式部大輔出府かけ上京
天氣伺之節御渡之由ニ而關東ゟ持下り候由

○宅ゟ家來呼可渡書付

加　賀　中納言ゟ

先達而
御上坂之儀被仰出も有之候處方今長防之形勢全鎭靜共不相聞旣ニ激徒
再發之趣も有之被於京師候而も深被惱
宸襟被
仰進候儀も有之且先達而塚原但馬守御手洗幹一郎被差遣御趣意若相背
候ハヽ、急速　御進發被遊候間御日限被仰出候節は聊御差支無之樣可致
旨被　仰出候
右之通被　仰出候間可被得其意候

三月

加　賀　中納言ゟ

當夏中爲御警衛上京可致處追而御沙汰有之候迄其上上京之儀ハ先見合

重臣共爲差登御警衛嚴重可被申付候
右貳通三月廿九日持歸り留守居呼渡之
○丑三月廿六日筑前秋月藩何某ゟ文通
此節宰府ニ罷在候公家々來共名前相分り候付入御覽申候

三條殿內
森寺大和守　三宅左近　戸田雅樂
太田司馬　杉山拙藏　山岡榮之進
島村左傳次　山本忠亮　森岡延太郎
武部陳尾　安藝盛兵衛　小藤又兵衛
谷　晋　芳木春太郎　小松宗四郎
水野溪雲齋　土方楠左衛門　丸茂文輿
乾　熊太郎　高橋久之助　安田繁藏
松山政吉　小谷三吉　安部助之進

鶴吉　新四郎　吉藏　喜兵衛　曾藏
麻吉　力藏　源藏　松次郎　清吉
直吉　宮五郎　馬六疋

三條西殿內
安井千代國　宮原主稅　藤田喜八郎
大山喜太郎　大澤虎吉　大澤勝藏

東久世殿內
渡邊左門　藤忠雄　今井左司馬
境　吾助　島三郎　萩野元七
中村竹藏　高津定吉　同喜代藏

壬生殿內
長村縫殿　藤田主水　安藤直樹
平川和三郎　奥田喜太郎　田中重衛

大谷榮藏

四條殿內

小西直江田村豐前三浦主稅

櫛田達男木村琢麿坂本悅次郎

福賴三代吉早川巳之助上野直次郎

新藏

右之外出奔致し候者不知數

○今夕宅ゟ元千代殿家老相越候節可渡事

德川玄同殿ゟ

方今長防之形勢全鎭靜共不相聞候ニ付

御神忌御法會濟　御進發も可被遊旨被　仰出候依之玄同殿ニは　御

先手摠督被　仰出候間格別被盡忠勤候樣ニとの

上意候

元千代殿家老衆ゟ

毛利大膳父子征伐ニ付而は先達而前大納言殿ゟ諸藩討手之摠督被　仰

付候處今般之儀は深キ　思召之御旨も被爲在　御先手摠督玄同殿ゟ被

仰出候尤御病氣之段は兼而御承知も被爲在候得共格別御勉强御出張被

在之候樣被　仰出候

此段玄同殿ゟ可被申越候事

右貳通四月十一日持歸家老ゟ直ニ渡ス

○四月十五日松平伯耆守殿大目付御目付ゟ御渡書付

此度御進發被　仰出候付而は參勤之面々國邑發足之儀は暫時見合罷在

候樣可被致候

右之趣中國四國九州筋之面々ゟ可被達候

四月十五日

○右同日御渡書付

今度　御進發之節御供可被　仰付處當節不容易折柄水戸殿ニは御愼中
紀伊殿ニは　御後備元千代殿ニは御幼年ニ而深御心配被爲在候間其方
儀御留守被　仰付都而御政事向御委任被成候間年寄共申談万端厚相心
得精勤可致候

右　御直ニ被　仰含之

○四月十九日申渡書付

酒　井　雅樂頭ニ

百四十

年來精勤其上領内政事向格別行屆一段之事ニ被　思召先達而隱居之儀
も御差留被遊候事ニ而當今不容易御時勢ニも有之候間猶此上精勤可被
致候依之出羽國御預所御收納上り高を以其方一生之内被下候

右於白書院椽頬替席伯耆守渡之

○四月十九日宅ニ銘々家來呼可渡書付

上　杉　彈正大弼

毛利大膳父子始江戸表ニ被　召寄候ニ付右取扱之儀寂前相達置候處此
度長防爲御征伐御進發被遊候旨被　仰出候ニ付而は取扱之義先不及其
儀候事

伊　達　遠　江　守

同文言

○四月廿日宅ニ家來呼可渡書付

脇　坂　淡　路　守

此度毛利大膳父子始爲
御征伐五月十六日
御進發被遊候旨被　仰出候ニ付而は申立之趣も有之候間其方儀御先手
之先鋒被　仰付候間可被抽忠勤候
此度　御進發被　仰出候ニ付而は越中守承知已前之事ニは候得共格別
之存意を以申立之趣各及

細　川　越　中　守

言上候處厚キ心入之段
御沙汰有之候依之別紙之通被　仰出候此段相達候事

○大目付ニ

今般　御進發被遊候ニ付而は中國四國九州筋之面々何れも國邑ニ人數
備置候樣可被致候
右之趣早々可被相觸候

四月廿日

去ル朔日　御進發之儀被　仰出候趣早急國許ヘ申越候處越前守承知被
致此上彌　御進發御日限御治定之上ハ　御先ニ大坂迄出陣御待受致度
心得ニ御座候間兼而伺置候樣今便被申越候然處今般日限御治定被仰出
候儀ニ御座候へハ早々御沙汰相伺國許ヘ申越度候間此段御内慮奉伺候
以上

四月廿二日

松平越前守内
草尾精一郎

○四月十三日

此度　御進發之節御旗本御後備被　仰付候

松平丹波守
内藤備後守

○紀州樣ゟ御伺書

此度　御進發被　仰出候付而は被申立之趣も有之候付宸前被　仰出候
通御旗本御後備心得候樣且右ニ付大坂
御城御守衛之儀は　御免被　仰出候ニ付紀伊殿ゟ
公方樣御初ニ御禮之儀如何可被致哉下略

四月十四日

○四月廿日出江戸來簡

上樣今度ハ餘程之御憤發ニ而閣老方ニ度々御催促被遊此度ハ存分職掌
を盡し

朝廷ゟ申譯仕心得ニ候間興廢存亡ハ時之運ニ候間
神祖ニ誓て長征を致スとの　上意ニ御座候由廿一日西丸より行軍駒場
おゐて御旗本歩兵隊調練　上覽如左
大砲十門　熕手八十人　歩兵隊　八大隊　御先手組　四小隊　小十
人組　四小隊　騎兵隊　ミニーカドロン（百四拾騎計）講武所壯士　千六百
人餘　御狀机（牀几カ）隊　御旗本衆　數千人
以上

○四月廿五日高須人ゟ近國藩ゟ來簡之由
天下之形勢種々變化仕候事ニ而今度彌十六日
御進發と申事夫ニ付宗藩御用人五味織江と申人當月十三日閣老御宅お
ゐて封物御渡ニ相成同十四日東都發足十八日曉名古屋ゟ到著　玄同公
今度御先鋒御揔督被爲蒙　仰候處　前亞相公御不滿と申事御尤ニ奉存
候　御請被成候哉御斷被　仰立候哉不決と承り候何分二ツニ割れ候樣
相成可申と杞憂を抱申候
一今度　御神忌ニ付彥根侯
御名代之處東都之所々張札いたし右侯歸路討取可申万一相援け候諸侯
有之候得は無據討取可申との事ニ付餘程之增供有之又
幕府ゟも御援兵御差遣と申事然ニ日光十八日出火と申事幷彥根侯如何
之說も御座候
一水戸表浮浪之家族共夫々仇打之願書差置本國出奔田沼侯幷松前侯を目
さし候と申事又南部津輕宇都宮大分脫藩水戸過激家ニ與し筑波山ニ楯
籠候と申說實說之樣ニ承り申候
一東都三芝居　御免と申事小團次耕雲齋の筑波山ニ籠り候所興行大當り
之よし
一大目付塚原但馬守樣御目付御手洗幹一郎樣比日柔名早打にて御通行東
下之由夫ニ付長防形勢如何哉ニ被存候

四月五日

○大垣人來簡

五月五日ゟ大垣俵町鯛飯之宅ニおゐて虎の見せ物有之幷ニ音呼鳥十品見せ申候ニ付同日見物ニ參り候虎の目存外ハツキリと見へ不申頭ハ身の割合ゟ大ニ見せ物ハ御免無之ニ付虎足を痛メ候付養生爲仕度と申願之由（案に先年名府若宮ニ而見せし大虎なるへし　添物ハ大高侯の卒後拂になりし品なるべし）

一同日東本願寺門主幷新門主通行八時過比御坊ゟ著見物の人群參いたし且又剃刀請候人貳千人餘と申事何レも白衣にて髮をさばき參り候實ニ可嫌ものなり亭主の有之婦人なと剃刀の式の實ニ不相濟事ニ而右樣之儀尤經文ニも無之由全く本願寺の錢儲に初候事ニ可有之右樣之事を請る者ハ馬鹿なり（或人之說ニ素より論するニたらず一文不知の者の事ゝ市川團十郎なとも同し道具の門跡ゝ佐渡川（サワタリ）渡船之節或人の狂詠ニ

門跡を九艘のふねに打のせて御川の端ハ婆々だらけなり

御座船壹艘外八艘御馳走ニ出揃計九艘なりし

門跡鑓なくしてさひしきニ付何の爲持度物なりといへは或人の曰竹の先ニ鈴を付て爲持可然と夫ハ何故と申せハ金（カネ）へんにせしめるといふ字なれハなり

等覺坊誓雲寺兩寺ゟ立寄之筈ニ而普請も出來候處當朝ニ至り立寄無之同行はしめ力落し候由

五月六日

乙丑

連城紀聞

二

○正月八日彦根侯御届

常野兩州之賊徒中山道邊落行夫ゟ越前路ゟ落越候ニ付追討四隊之人數繰出賊之動搖ニ寄所々陣替無油斷手配罷在候段先比不取敢先御届申上置候右四隊之人數出張中進退左之通

一番手　木俣土佐隊

十一月廿八日戸田采女正殿御家來ゟ賊徒追々中山道押登來月朔日ハ必合渡川ゟ可掛由ニ而同晦日迄ニ美江寺宿迄爲援兵人數繰出し候樣懸合有之候間同日致出陣候處賊徒忽河渡川ゟ押懸候勢ニ付右驛迄早々繰出候樣猶又懸合有之候仍之同日夜通ニ行軍合渡川上之渡場小紅（コベニ）ト申所ゟ出張相固居候處賊徒間道ゟ相廻り長良之渡場相渡り天王村ゟ屯聚いたし十二月三日揖斐谷汲之方ゟ押移候趣相聞候付合渡宿手前本田村迄人數引揚賊之動靜致探索候處街道筋ゟ押出し候哉ニ相聞候付同日采女正殿御人數と打合大垣驛相固候樣跡ゟ引返候哉又ハ暫致滯留江州路ゟ出

（原註）長良ハ芥見之誤なるべし揖斐泊ハ朔日なり

候哉難相分關ヶ原驛御出張之由比圖書樣ゟ垂井宿迄引揚相固候樣御達ニ付同宿ゟ人數引揚申候然處揖斐近村ニ分隊致し休泊且徘徊等致居候趣ニ付賊之本陣揖斐ゟ可打入手筈ニ相定貳番手貫名筑後隊ハ赤坂驛ゟ土佐隊ハ美江寺宿ゟ山口ゟ打入候積之處御目付江原桂助樣歩兵御引率加納宿迄御著陣直樣御打入被成候間山口之方ゟ後詰可致樣御達ニ付卽刻垂井宿ゟ押出シ長屋村迄繰込候處賊不殘越前路ゟ落去候ニ付桂助樣御人數も御引拂被成候間當手勢も引上候樣御達ニ付關ヶ原宿迄引揚申候然處賊今庄迄押來候趣ニ付三番手新野左馬助隊ハ木之本宿迄繰込候樣圖書樣ゟ御達有之繰込候積之處伊部宿ニ而伏屋七之助樣ゟ早々柳ヶ瀨ゟ相詰候樣御達書致到來候間右同宿ゟ繰込候處賊新保村ゟ向ヒ候趣ニ付松平越前守樣御勢左馬助五右衞門隊人數共今庄宿ゟ二ツ屋之方ゟ繰込候趣ニ而栃木峠中河內驛等手薄ニ相心得候ニ付伏屋七之助樣ゟ御屆申上卽刻中河內宿ゟ繰込相固居候處賊屯集所新保村ゟ四人脫走致し來候間召捕推糺致し候處左之通

人數十六人之隊長　常州新治村　豆尾山　寺別當　秀道

書記役兼　秀道小性　田村幸一郎

元京粟田口境內新之町　常州府中香宿カ村上町　針醫清悅

山城屋半兵衞悴兼吉と申候由　秀道家來　民彌

下總國豐田郡古澤村

右は於所々暴行相働候趣及白狀候付兼而御觸面之通於柳ヶ瀨不殘打捨申候尤其節由比圖書樣ゟ御屆申上置候然處賊徒不殘加州家ゟ降伏段々及歎願候付一橋樣ゟ御伺相成候處御所置振追而御沙汰有之迄御同家ゟ御預ニ相成候ニ付諸手陣拂候樣御達御座候間人數引拂同廿六日致凱陣候

二番手　貫名筑後隊

十一月十九日本俣土佐隊ニ引續彦根表出發同夜關ヶ原宿ゟ著陣賊兵共
太田川を越段々押來候間援兵之儀采女正殿御人數ニ而申來候付晦日早
天關ヶ原宿出發美江寺宿ニ滯留罷在候處賊兵共合渡川之備嚴重なるを
聞受候由ニ而鵜沼宿之邊ゟ横道ゟ這入天王村粟野村ゟ著陣谷汲之方ゟ
可向哉ニ相聞候付十二月朔日朝人數引返晝時比赤坂宿迄引揚候處賊谷
汲ゟ參梅谷越を江州路ゟ可出趣ニ相聞候ニ付猶又人數垂井宿迄引揚梅
谷ゟ間道幷本道赤坂ゟ勢州路ゟ後詰等相心得候處同夜は賊徒悉く楫斐
ニ著陣いたし候由に付同二日先陣も垂井宿ゟ繰揚猶江州路ゟ所々間道
有之義ニ付同三日當陣ハ關ヶ原迄繰揚候處賊兵共二日楫斐を出立金原
邊ゟ參候趣ニ付猶又采女正殿御人數打合同四日垂井宿ゟ繰込翌五日楫
斐ゟ押寄候處賊這伏峠之難所を越へ越前路ゟ向候趣注進有之同六日人
數今須迄繰揚北國之樣子探索罷在候處北國手當左馬之助五右衛門兩隊
追々相進左馬之助隊を今庄迄繰込候趣ニ付同七日追々相進同九日柳ヶ
瀨ゟ著陣罷在候處賊兵共池田之庄邊ゟ今庄ゟ參候趣ニ付同十日中河内
驛まて繰込候處只今今庄宿ゟ人數繰出候而ハ賊引返府中邊ゟ海路ゟ出
可申ニ付今庄邊ハ相通し葉原ニッ屋之山間ゟ追込討取候手筈ニ加州樣
御人數と打合候趣先隊ゟ申越候付其儘滯陣罷在候處同廿四日賊徒降伏
一同加州家ゟ御預ヶ相成候間陣拂之儀御目付樣ゟ御達有之候趣先隊左
馬之助ゟ通達有之候間同廿五日人數引拂同廿七日致歸陣候

三番手　新野左馬助隊

十一月廿九日彦根表出發關ヶ原迄出張所々間道等手配嚴重相固居候處
賊徒共越前路ゟ相廻り候趣ニ付右人數引揚中河内宿迄追々繰詰越前之
模樣致探索候處賊徒池田谷ゟ屯致し終ニハ若州路ゟ落行候哉ニ相聞左
候へハ今庄宿ゟ必定落來可申と十二月八日右驛ゟ繰詰同所ニ而可致接
戰心組之處越州樣御人數ゟ當所手厚ニ相固候而ハ定而府中ゟ押懸可申
左候へハ一橋樣ゟ被仰渡有之御計策之葉原新保村ニ而挾討之手筈差障

且府中之固手薄之由ニ而援兵之懸合有之候間任其意翌九日脇本村迄繰込候處先手之賊共衆而倉谷を出今庄宿泊同十一日新保村ゟ落行候付追討可致越州様御人數ゟ打合候處人數手薄之折柄ニ付當手ニ而先鋒可致旨挨拶有之則今庄驛迄致出張候處既ニ落行候間猶倉谷ゟ殘黨貳百人許落越且新保村ゟ先越之賊徒共俄ニ引返候趣頻ニ注進有之候付今庄南之方若州追分之所ニ而接戰ニ及可申心得ニ而備立致し野陳を張段々探索致し候處先其様子も不相見候付越前様御人數申合彼方先陣ニ而二ツ屋迄繰込左馬助隊ハ新道村ニ扣居候處賊徒共ゟ加州様ゟ歎訴差出候由ニ而越州様勢ゟも相談有之御兩家ゟ御所置方一橋様ゟ御伺ニ相成候由之處同十五日ニ至り明十六日午之刻可及戰爭趣越州様ゟ申來候付當隊も繰詰候様越前勢ゟ打合有之候然處二ツ屋村ゟ木之目峠まて之所ハ御同家様御人數押詰且深雪ニ而壹人立往來ゟ通行難相成外ニ可然責口無之哉懸合候處西之方田尻村人數手薄ニ付右ゟ廻り可然旨御同家ゟ挨拶有之候ニ付二ツ屋之方ハ筑後隊相詰左馬助隊は早朝ゟ阿曾浦上迄致出張候處右田尻村ゟ加州様勢手配有之趣且時刻後候而は無詮義ニ付阿曾浦ゟミトヲ山越ニ而保村ゟ差付之間道ニ有之間右ゟ打入候ハヽ可然見込ニ而越州様御人數申合未之刻迄山上ゟ繰詰候處新保村眼下ニ見下し屈竟之場所ニ付山上ゟ一時ニ逆落横合ゟ討止候覺悟ニ而一先斥候差出候處戰爭之様子更ニ無之仍之葉原村固加州勢ゟ問合候處明十七日辰之刻彌諸手打入候趣挨拶有之候間猶其手配致置候處同夜同衆ゟ兼而辰之刻可及戰爭旨打合之處賊徒ゟ歎願書差出候付一橋様ゟ差出ニ相成候間御左右有之迄戰爭相見合可申趣申來無余義御指揮相待居候處同廿二日賊徒共彌降伏いたし當分加州様ゟ御預ニ相成候趣尤右始末相濟候迄之内諸軍心弛無之様御目付様ゟ御達有之候然處同廿三日廿四日ニ賊不殘敦賀表寺院ゟ引取加州様勢ニ而取締相附候而陣拂之儀御達御座候間同廿五日阿曾浦人數引拂同廿八日致歸陣候

四番手

十一月晦日曉彦根表出立（此間文略凡前の如し）十二月十二日今庄ゟ人數引返し板取ニ一宿いたし翌十三日如元栃之木峠ニ陣所を構へ罷在候處同十六日越州樣陣ゟ彌明十七日辰之刻ゟ手始戰爭之旨申來候趣築後方ゟ通達有之則栃之木峠ゟ新保村ニハ八町計有之宮之山山上ニ鐵砲引揚諸手打合何時ニ而も賊陣ニ可打入手筈ニ致置候處文略同廿五日陣所引拂翌廿六日致歸陣候

右之通ニ御座候尤何れも在所表ゟ遠路ニ出張如前顯賊徒構近致奔走候儀ニ付其都度々々模樣も不申越候得共場所々々おゐてハ鑑軍之御方ゟ諸事御達有之從當手も御請達仕置候儀ニ御座候此段御屆可申上旨掃部頭申付越候、以上

元治二乙丑

正月八日

井伊掃部頭內

富田權之助

○越前大野侯屆書貳通

先達而ゟ追々御屆申上候脫走之賊徒爲追討越前國今立郡稻村ニ宿陣罷在候家來人數之內六隊ハ松平大藏大輔仍指揮同國敦賀郡濱續大比田村と申所ニ寄詰二隊ハ今庄宿ニ相備諸家申合可及攻擊手筈ニ御座候處賊長ゟ加州陣營ニ再應歎願降伏狀差出候付一橋中納言殿ニ伺之上右降人不殘加賀中納言ニ御預被

仰出候由ニ而鎭靜相成右場所出張之御目付由比圖書織田市藏ゟ家來之者ニ相達候趣も有之右陣所舊臘廿四日ゟ追々引拂翌廿五日迄ニ人數不殘歸邑仕候旨在所役人共申越候付此段御屆申上候以上

土井能登守

正月十二日

先達而御屆申上置候私領分越前國大野郡南山中村之內八之村賊徒攻擊之爲自燒仕候箇所左之通

秋生村上下兩村　中島村上下兩村　笹下村上下兩村　關當戶村

本戸村　橋切落し四ヶ所

右之通ニ御座候旨在所役人共ゟ申越候付此段御届申上候以上

正月十二日　　土井能登守

○京師ゟ大垣侯ゟ

御沙汰書

常野脫走之賊徒共舊冬京師ゟ追近候付一橋中納言致内願爲追討出張其節人數差出候處賊徒降伏早速及鎭靜之條一段之事ニ思召候旨　御沙汰候事

正月　　戸田采女正

○加賀侯屆書

去月廿三日於京都一橋中納言樣ゟ詰合家老御呼出於禁中御沙汰之趣御書取御渡御座候右寫相添此段御届申上候以上

別紙

常野脫走之賊徒共舊冬追々京師ゟ追近候付一橋中納言致内願爲追討出張其節人數差出候處格別丹誠早速及鎭靜候條平生指揮行屆候故之儀と一段之事ニ思食候旨　御沙汰之事

正月　　加賀中納言

加賀中納言内　加須屋　十左衛門

○於敦賀彦根侯人數警衛罷在候賊徒

拾壹番五拾九人　　拾貳番五十九人

拾三番五拾八人　　拾四番六十人

拾五番五拾八人　　拾六番六拾壹人

〆三百六十壹人（二月九日御届各名前有之前記同様ニ付略之）

○越前侯御届

於京都表去月廿三日一橋様ゟ重役之者御呼出有之則罷出候處傳奏衆ゟ御達有之候大藏大輔ゟ申越候此段御届申上候以上

二月十一日

別紙

常州野州脫走之賊徒共舊冬追々京師ゟ追近ニ付一橋中納言致内願爲追討出張其節人數召連出馬候處賊徒降伏早速及鎭靜之條一段之事ニ思食候旨　御沙汰之事

正月

松平越前守内
草尾精一郎

越前宰相

○越前大野侯御届書

覺

儀左衛門悴ニ而家出仕候旨申立候

私家來柴田勝之助と申者之弟にて身持不宜昨年中家出久離仕奉行所ゟ御届申上置候

宮尾爲之助丗廿一才

柴田貞藏丗三拾才

右之者共儀先達而御届申上候通私領分越前國大野本戸村おゐて取押禁錮申付置候處何レも武田伊賀ゟ隨身罷越候者ニ付及吟味候處別紙口書面之通ニ御座候仕置筋之儀如何相心得可申哉此段奉伺候以上

二月廿八日

土井能登守

別紙

武田伊賀ゟ隨從御當地ゟ罷出候迄之始末左ニ申上候

私儀去ル文久三亥年六月劔術修行之爲出府仕同年八月武田伊賀方ゟ住込同人次男武田魁助ゟ相便劔術修行罷在候處昨子六月中耕雲齋隱居被

仰付同十二日江戸發足海路罷下候節供仕水戸表ゟ罷越於同所永之暇願
出候處可遣候得共道筋關所印鑑所持不致候得ハ旅行難相成候付暫之内
滯留致候樣申聞逼留中同十九日耕雲齋出府ニ付猶又供致呉候樣被相頼
小金井宿迄罷越候處松戸幷千住等之關門通方難相成候付同所ニ滯留罷
在候付其砌再三暇之儀相願候得共何分江戸表迄供致呉候樣申聞其比松
平大炊頭樣水戸表ゟ鎭靜之爲御越ニ付耕雲齋義も御跡ゟ引戻水戸御城
下迄罷越候處被申聞候趣も有之無據湊邊所々ニ罷在其節ゟ私病氣ニ付
武田彦右衛門下宿ニ養生いたし居候處十月湊近邊放火有之右同人筑波
山ゟ相越候趣ニ付跡ゟ同所ゟ罷越其砌筑波山屯集之者共一道脫走致し
中山道本庄宿ゟ夫ゟ間道仁田通望月宿ゟ罷出候其砌生國寂寄之儀ニも
有之猶又强而暇願出候處聞屆無之其上可及斬首樣子ニ付不得已跡ゟ附
添參り日向村ゟ懸り於同所一同跡邊ゟ引返候評義有之趣ニ付此上行先
も不相分且筑波山浪徒同樣汚名を請候も殘念至極之次第ニ付耕雲齋附

屬安藤彦之進ゟ申者ゟ及內達柴田貞藏申合夜中彼地忍出御領分本戸村
ゟ立越候處御召捕ニ相成候義ニ御座候尤國元ゟ立入候義ハ貞藏ゟ相便
國元迄無滯被相越候樣仕度存念ニ御座候儀申上候義無御座候
右之通少も相違申上候儀無御座候以上

宮尾爲之助

元治二乙丑年二月

私儀武田伊賀ニ隨從御當地ゟ罷出候迄之始末左ニ申上候

私儀文久二戌年六月中旬御當地立退中山道通出府仕途中ゟ麻疹相煩七
月中床ニ著其後八月水戸御藩奥津藏人方ゟ住込同十二月武田耕雲齋方
ゟ被召抱同人上京之節供致し罷登翌亥五月迄滯京夫ゟ歸府同七月耕雲
齋水戸海岸爲見分罷越候處附添相越八月比歸府同十二月廿八日耕雲齋
義浪士取締被　仰付水戸表ゟ罷越ニ付供仕翌子正月中同人出府ニ付供
致し出府仕候處同六月中耕雲齋仍願隱居被　仰付同十二日江戸發足海
路罷下同十六日水戸著候處隱居願濟之上ハ永之暇差遣候間當所爲見物

（原註）私考與津歟

勝手次第何方ゟ成共罷越可申旨被申聞滯留中同廿九日耕雲齋俄ニ出府
ニ付猶供致呉候様被相頼小金井宿迄罷越候處松戸幷千住等關門通方難
相成七月中迄同所ニ逼留罷在候處松平大炊頭様爲鎭撫水戸表ゟ御越ニ
付耕雲齋儀も御跡ゟ附添引戻水戸御城下邊迄罷越候處ゟ相支無據湊邊
所々ニ罷在其後八月中私義病氣爲養生湊町家ニ止宿仕十月下旬病氣快
候付不寐番被申付同廿三日朝湊近邊不意ニ放火有之其砌筑波山屯集之
者共一同彼地脫走いたし中山道本庄宿ゟ出夫ゟ間道下仁田望月宿相ゟ
懸り中山道下諏訪ゟ信州飯田ゟ罷越間道濃州日向村ゟ御當國ゟ差向罷
越候處御領分南山中本戸村ニ而被召捕候義ニ御座候尤日向村ゟ御當國
ゟ立入候義は耕雲齋指揮を受爲探索罷越候義ニ御座候半と再應御吟味
御座候得共右之儀毛頭無之兼而老母ゟ對面仕度心願ニ御座候處先々ニ
而脫走獨歩仕候而は御關所通方難相成と相心得不得止日向村迄附添罷
越同所よりハ程近之義ニ付右老母對面之儀屆捨罷越候義ニ而聊偽申上
候儀無御座候
右之通少も相違申上候義無御座候以上

元治二乙丑年二月

柴田貞藏

○上州高崎侯屆書

舊冬以來追々御屆申上候右京亮人數上州下仁田邊おゐて常州脫走賊徒
追討之砌討取手負取調仕候處左之通

一三十四人討取

內五人下仁田戰地ニおゐて討取死骸其場ニ有之
七人中小坂守返場ニ而討取賊徒燒捨仕候
廿二人信州境目山峠迄死骸持退同所切懸邊ニ而燒捨候

一十八人

但下小坂通を板戸又は四手等ニ載セ賊徒信州地ゟ持越

右之通御座候處他領其上懸隔居取調方不行屆素ゟ場中首級を揚候儀ニ

無御座候間表立御屆不仕候此段各樣迄申置候以上

二月廿八日　松平右京亮家來

菅野治兵衛

○頃日所聞加賀越前取締ニ成禁錮之賊徒共從公被命嚴刑ニ被爲處頭分之者は打首を江戸表ゟ被差出筈之由ニ相聞候旨二月十日

一勝田國手話ニ云高木甚五兵衛晤話之由同人知行所之者商用ニ而敦賀ゟ相越居候處武田伊賀始猎（マヽ）賊之者御仕置之旨承り其場ニ至り見物せしニ伊賀守髭長く老人ニ而始ニ打首續而段々斬首拾三人迄打首を見るに別而面白キ事もなく場所を立披しと歸村之上高木の第宅ゟ來り話したるとゝ亦勝田翁の話に伊賀の首打たる時其子之由三人傍に在りて首打否謠を諷ひ候由三人同音に諷ひし謠の文句ハ不知とゝ又伊賀の子ニ妻子等無之ト云役方之者を再應斯督せしかハ腹立し立上りて蹴倒す凡三間も蹴られて即死せしとゝ

於越前敦賀二月一日吟味姓名　笠松出

家老　武田伊賀
町奉行稻之衛門事　田丸左京
先手物頭　長谷川道之助
小十人目付平三郎事　井田因幡
小十人格　小川鄉校
表右筆　川瀨專藏
譜代與力　八木橋誠之進
主介事　小林忠雄

書院番頭　同彦右衛門
小性頭取　山國淳一郎
使番代役　村島万次耶
源太郎事　朝倉彈正
大廣間席多氣平山城事　瀧川平太郎
大番三橋半六事　山形半六
小普請組根本三郎左衛門事　岸信藏
川上清三郎

小性組頭目付懸り軍事懸り　山國兵部
側用人藤田小次郎事　小野斌男
大番　武田魁助
文武世話役竹内百太郎事　竹中万次郎
新番組頭後藤慶之進事　伊藤健藏
小普請組　國分信太郎
給人畑彌平事　小栗錄平
高木七太郎

内藤昇一郎　前島徳之進

以上　〆貳拾五人

一説云元水府在勤脱走之者當時廿七人ニ而卽御仕置相成其餘惡黨者等隨從して多人數之ト

一頃日中山道を右浪徒打首を三級警固して江戸ゟ持行或人往合て浪士頭分之首ニ候哉と聞答ニ頭分ニ而ハ無之と云よし右ハ魁頭の首といへハ若殘賊之者謀を以可奪取哉も不被計仍而斯答へしニやト云々

太田代云二月八日右首級太田驛通行之由

一右首級福島御關所通り懸り候處逆徒之首通候儀從

公邊御沙汰無之旨ニ而不通仍之本陣ニ逼留江戸表ゟ伺ニ相成候由之處手間取御否及遲々候旨首ハ腐り汁流れ出臭氣難堪由福島ゟ申來るト云々

聞合覺御達

浪士共儀當正月廿九日ゟ加州樣御手切ニ相成其儘彦根樣若州樣御引請ニ相成追々御調相成候處惣人數七百七拾六人之由寺三ヶ所を引拂同所船町と申所濱藏ゟ押込相成二月四日四ツ時比大將分等廿四人死罪打首罷成此場所今濱村永建寺近邊來迎寺野と申所之此內大將武田伊賀守首弟同姓彦右衛門武田悴金次郎當年拾九才幷淺倉彈正右四人之首ハ御公儀樣ゟ差上ニ相成候由其跡之儀ハ只今ニ延引種々風評之儀計ニ御座候

御若年寄　御本陣　今濱村　永建寺
御公役　田沼玄蕃頭樣　清水町　要權寺
大御目付　同　黑川近江守樣

二月

○武田伊賀守　同　彦右衛門　同　金次郎
同　魁助　田丸左京　山岡兵部
山岡淳一郎　竹中万次郎　小野斌男
山形平次　井田因幡　朝倉彈正

川瀬專助　瀧川平左衛門　岸信藏
長谷川道之助　市尾孝之助　瀧口六之助
小野藤五郎　斧澤助九郎　村島万次郎
秋山又三郎　宋橋誠之助　帳付平太郎
桑屋新之助　檜山三之助　岩間文次郎
國分新太郎　濱野藤次郎　杉山長次郎
澤田新之助　佐々木重藏　前木光之助
朝倉三四郎　小番之允　高橋市兵衛
下野廉一郎　小栗彌平　川上清九郎
川崎鎌之助　原藏之助　加藤宗助
小森忠雄　野口主馬　森誠之助
壽金定太郎　庄司與十郎　伊藤榮太郎
鈴木秀太郎　尼崎俊藏　平野重太郎

難波孫之丞　島田文右衛門　深谷助三郎
高野長十郎　中崎貞助　大內唯之助
高橋元次郎　櫻井辰之助　大竹吉五郎
沼田亮藏　築原造酒藏　高形與四郎
內藤昇一郎　小村庄左衛門　照沼粂四郎
房崎善藏　杉崎熊之助　田中重藏
田口彦七　見川新八　大久保信三郎
關友七　岩戸常藏　山口四郎右衛門
上田孝藏　岡野龜太郎　栗山清吉
川崎藤助　笹田幸三郎　粟飯原三郎
幡谷善七　谷村與右衛門　川澄清右衛門
三野六郎左衛門　田中三之助　小松崎庄之助
笹田福次郎　登三佐兵衛　中根平助

堤　三四郎　山田國次郎　原山勘之助
坂本勝次　坂本源助　小島重次郎
磯部春之助　菊代吟太郎　川澄鬼平
小田部重平　田村七左衛門　藤田平左衛門
渡邊久助　加藤祐三郎　三鴨善七
溝口大平　大出大助　高木來
小林勇次郎　長谷川新六　杉本富藏
野口重吉　石川甚五郎　立花文次郎
黒澤利八郎　中村清之助　三木源助
木山藤五郎　瀧口清之進　塚田與吉
宮本嘉傳次　高田金次郎　井坂奥藏
狛　奥三郎　武田春吉　本多巳之助
横田藤十郎　野村德兵衛　三田德兵衛

蓮沼御助　中山兼三郎　佐々木久助
服部由兵衛　田崎植藏　清水八次郎
青野富藏　鴨田半七　熊坂喜三郎
宇佐美孫兵衛　石川銕藏　關登一郎
成井藤九郎　赤舘織之助　吉川猪之助
鶴田善兵衛　小家平三郎　小杉主殿
小俣鎌之助　高橋勝三郎　山中善七
米川忠七　長尾定吉　大澤雄太郎
深田嘉平次　富永銕藏　武藤龜吉
森　庄太郎　小河忠吉　堤　善兵衛
有田八郎　奥本孝之助　平山辰次郎
武久良之助　小俣啓次郎　加藤太郎
岡野音次郎　椿村定五郎　安藤清九郎

樫村忠兵衛　高橋四郎　酒井八三郎
鈴木庄次郎　山口庄助　長瀬鎌次
平野岩吉　桐伊助　片岡源次郎
本村水之助　石川忠右衛門　小林由右衛門
計田藏之助　鶴田孫平次　中川新助
山形彌太郎　山田瀧之助　清水源藏
月岡久次　鈴木清吉　細谷久助
木村彦次郎　小形德次郎　關源兵衛
岩松李之助　福名利兵衛　中村友吉
小野德三郎　長谷川定吉　塚原万次郎
寺本次郎吉　鈴木信藏　關口善太
加蘭新太郎　藤田啓助　大和田熊吉
大和田秀次郎　武田幸藏　薗部仙助

小川新三郎　西谷宗七　山本齊一郎
長谷川啓助　飯村信之助　小笠原信之助
小泉又助　坂本孝一郎　青木與五郎
二川由之助　鶴田與八郎　大分大助
金澤勇助　井澤彌平　長谷川佐助
覓忠三郎　近藤半藏　堀兵助
畠藤吉　前野彦藏　鬼澤彌平
野口李次郎　關口伊助　關口定吉
乾源藏　島山七藏　荒井主計
岡山主水　齋藤安之助　關彦次郎
鈴木源吾　小沼新太郎　市毛孫七
笹田彦八　中村宗兵衛　齋藤久右衛門
中山重藏　藤田伊勢　小川三郎

飯原芳之助　楠　要人
綿川誠之助　芝田清兵衛
福田次平次　潮田政三郎
菅谷安之助　奥村清吉
坪山源助　金輪清之助
幡山利兵衛　米川小次郎
石神三次郎　山本三五郎
取田秀之丞　田丸定之助
加藤庄吉　鬼澤熊三郎
高橋喜助　佐野新一郎
藤岡大助　樋口友之進
高崎源三郎　吉川久藏

此末何之誰家來中間別當略之

山田市郎
關口直十郎
山田儀八郎
鹿島茂兵衛
高內彥三郎
宮內彥太郎
宮崎彌三郎
石田彥太
鴨下勇次
荒木政吉
畠山殳之進
（朱書）名前貳百八拾壹人

摠人數七百七拾貳人

越前敦賀本妙寺淨雲寺本勝寺

右三ヶ所ニ居候

以上

一令尾侯家來之內右浪徒有之請取ニ罷出候樣越前ゟ差紙來候處元家來にて立去候者故其段答有之由其後如何相成候哉不知ト或士談ス

先日御屆申上候敦賀表囚人之賊徒去ル朔日ゟ追々御呼出有之然處死刑之者有之候間斬人差出候樣黑川近江守樣瀧澤喜太郎樣ゟ同三日御達有之翌四日掃部頭ゟ斬人拾貳人差出賊徒之內別紙之通斬首仕候段出張家來之者より申越候此段御屆申上候樣掃部頭申付越候以上

二月十四日　井伊掃部頭內　山本運平

別紙

掃部頭方ゟ差出候斬人斬首仕候賊徒

武田伊賀守　武田魁介　山國淳一郎
村部万次郎　朝倉彈正　高野長五郎
八木橋清之丞　田丸左京　伊藤健藏
岸　新藏　川上清太郎　瀧川平太郎

右之餘左之賊徒ハ酒井若狹守殿ゟ斬人差出斬首仕候趣ニ御座候

武田彦右衛門　山國兵部　長谷川道之介
井田因幡　川瀨專藏　國分新太郎
藤田小四郎事小野斌男　山形半六　小栗彌一郎
竹中万次郎　内藤昇一郎　前橋德之助

右之通御座候

二月

○著戮期之歌

田丸左京（稲之右衛門）

人心横濱にしてたつ市はくにを商ふところなりけり
あたならぬあたに騷て神國のあたをあたともいはぬ世そうき

○大垣藩書類

敦賀賊徒二月上旬ゟ廿日比迄ニ不殘御成敗相濟候よし貳間半ニ長四間深サ壹丈八尺之穴を堀其内ゟ死骸を入る穢多其穴ゟ入鮓を漬候ことくニ詰候而追々入候由彦根之御手ニ而三百人若州ニ而三百人御仕置相成其内武田伊賀ハ彦根之御手へ渡り藩士何レも大悦にて首を刎候事を望候由

御裁許面

始末不恐

公義仕方重々不屆至極ニ付嚴科ニ可被處之處追而右次第恐入候義と心付加州勢ゟ降伏致スニ付格別之

御宥免を以斬罪申付者也

二月四日　貳拾四人
同十五日　百三拾九人
同十六日　九十八人
同廿三日　拾六人
〆貳百七拾七人
追放
二月十七日　七拾六人
同廿二日　百拾貳人
〆百八十八人
合四百六十五人
一賊徒摠計八百十八人不殘吟味致し候へハ數日相懸り候故先重立候者吟味ニ而後ハ追々罪科被　仰付との話ニ而子供ハ大名ニ致し遣ハスなど申示し候而付纏來候者共之由敦賀寺院ゟ歎願ニ付拾壹人寺預ニ相成候

右は二月廿八日公役衆敦賀ゟ御用濟ニ而當府大垣泊ニ付員數等之儀は御勘定衆手帳ニ有之寫也

一田沼玄蕃頭樣御用濟ニ而二月廿七日大垣御晝休ニ而御歸府別手組幷御付高木宮內樣等御通行有之候

○二月六日彥根來簡

常野兩州脫走之賊徒舊臘越前之地ニ落去加賀藩ゟ降伏仍之同國敦賀之寺院ゟ入囚置候處今般爲御取調大目付黑川近江守樣御目付瀧澤喜太郎樣濃州關ヶ原春照街道御通行ニ而正月十七日越前敦賀表ゟ御到著翌十八日越前彥根若州之三藩ゟ此度賊徒御取調ニ付右囚人警衛御用等も有之候間早々人數差出候樣御達書十九日彥根ゟ著翌廿日早天諸事爲打合御城使日下部內記出立同日八ツ時比宇津木兵庫隊三拾騎銃隊三組彥根表出立同廿四日敦賀宿ゟ繰込同廿三日中野三季之助銃隊二組出立廿五日敦賀表ゟ繰込右兩隊精兵凡貳百五拾人摠勢六百人餘扠又越前若州兩

藩ニも追々御繰込同廿七日三番勢揃ニ相成候處
御公義ニ而は兼而御手筈御取極有之哉明廿八日晩景ニ明曉ゟ賊徒御引
移しニ付早々人數出張候樣御達有之彦根勢ハ越前街道氣比之神社若州
勢ハ東町邊越前藩ニは濱島寺町邊加州藩ニは賊徒共是迄入囚罷在候本
側寺本妙寺長遠寺右三ヶ寺之內外警衛被仰付右四藩之摠勢凡四千人持
場嚴重ニ相固夜四時比賊徒共明朝
公邊ゟ引渡候旨御達ニ相成候處無兎角承伏仕候付廿九日拂曉ゟ御引移
被成往來警衛之儀は領主若州ゟ被
仰付乘駕廿挺ニ而兼而御手筈御座候哉濱手町土藏十六戸前御借受有之
廿九日一晝夜ニ一切引移ニ相成其節彦根藩越前藩ニは辻々警衛被
仰付候處越一番之土藏ゟ五番迄ハ若州六番より十番迄ハ越前十一番ゟ十
六番迄ハ彦根御預凡一戸前ニ六十人程ツヽ入囚罷在候右六戸前ニ賊徒
三百六十人之內武田初重立候者拾貳三人有之候夫ゟ宇津木中野兩隊五

十騎三番ニ組立一晝夜四度代りニ而土藏ゟ幕を張立嚴重之躰ニ御座候
引續二月朔日彦根御預十六番之土藏ニ罷在候武田始十二人之者共敦賀
永學寺御白洲ニおゐて御吟味有之田沼玄蕃頭樣ニも同日敦賀御著ニ相
成候間追日御吟味相濟次第夫々御仕置ニ可相成事と被存候
右一便一件大略如此御座候以上

丗二月

丗二月於敦賀賊徒御仕置連名

小澤軍左衛門討	彦根姓名
內山治右衛門討	武田伊賀
廣瀨辰次郎討	武田魁助
伊藤傳兵衛討	山國淳一郎
牧野藤十郎討	村部万次郎
大和田信五郎討	朝倉彈正
	高野長五郎

大久保與左衛門組　太田彦太郎　討
同組　高橋左傳治　討
同組　絹川幾太郎　討
黒野彈左衛門組　菅野金之助　討
同組　徳田銀之助　討
同組　石田輝之助　討
半橋清之進
田丸稻之右衛門
伊藤健藏
岸信藏
川上清太郎
瀧川平太郎

右之通彦根手ニ而討捨同六日六捨人討捨是又名前跡ゟ可申進候

但賊徒〆六百二捨二人

三百貳人　彦根手ニ而討捨
貳百四捨人　越前手ニ而討捨
八十人　若州手ニ而討捨

一同日若州手ニ而討捨

武田彦右衛門　山國喜八郎　長谷川道之助

井田因幡　川瀨專藏　國分新太郎
前島德之助　小野斌男　山形半六
小栗彌市　竹中万次郎　内藤昇一郎

右爲檢使田沼玄蕃頭樣黒川近江守樣瀧澤喜太郎樣其外諸御役人御出張

二月六日出十三日著　彦根　姓名

○大垣領東粟野村番非人新兵衛申口

二月八日疋田宿ニ參り浪人之樣子承候處當月四日重立候者廿四人死罪ニ相成其内首四ッ鹽漬ニいたし江戸表ゟ御廻し其後御裁許之節ゟ手筋を賴警固役之代ニ被雇始末見及候由

一同十五日御仕置有之候ニ付罷出候處敦賀ゟ四五丁程西ニ當り今濱村地内松原之間ニ來迎寺野と申狹き野有之其所ニ柵圍いたし入口ハ喰違ニ相成其内ニ胴首等打捨候穴巾貳間長サ三間深サ九尺程ニいたし三ッ堀有之同日百三捨九人死罪相成尤御條目讀聞セ有之有增左之通

其方共武田伊賀ニ一味いたし
公義ゟ討手御差向ニ可相成を辨ながら數度討手ニ敵對し所々往返亂
妨し万民を苦しめ不恐
公義次第不容易儀ニ付可行嚴科之處追而恐入と心附加州勢ニ降參致
ニ仍而
御宥免を以死罪申付者也

一右死罪人之内凡八分通ハ御條目水戸藩中誰と讀上壹分通ハ浪人誰と讀
上其餘ハ不殘百姓誰と讀上候得共銘々不殘苗字附人品も武家之歷々と
相見候由

一右浪人ハ初一度御吟味有之御裁許之節は二度目之御呼出ニ付何レも御
裁許とハ存不申候田沼樣御直吟味ニ而も有之哉又は御預替歟之心組ニ
而罷出案外之由

一十六日死罪九十八人

一十七日七拾五人
御免尤悴新吾外越前之者大野之者五人此六人夫々願人ゟ御引渡其餘六
拾九人願人無之ニ付柳ヶ瀨御番所迄送り出し同所おゐて追放之由

一右刑罪場ニおゐて誰取落し候哉常野雨州より之日記警固役之内拾取候
由ニ付借寫候旨申ニ付寫致し差出候樣申渡置

一二月四日御呼出之節武田伊賀ハ襠高袴割羽織同人弟同苗彦右衛門ハ麻
上下ニ而罷出候由承候

○丑二月太田御代官ゟ達
上古井村之者共浪士ニ被召連候手續口書
上古井村
平　七
兼　吉

右兩人之者去子十一月廿二日江州多賀ゟ參詣仕候處歸宅不仕候ニ付追
々相尋候得共行衛不相分候付其段御達奉申上置候處去ル廿一日夜歸宅

仕候間始末相尋候處別紙之通ニ御座候付手續書相添乍恐此段御達奉申上候以上

丑二月廿四日　　右村庄屋　座馬　銕郎

高田意六樣

御陣屋　　上古井村　平七　兼吉

私共儀去子十一月廿二日志願ニ付江刕多賀大社ゟ參詣仕此節歸村仕候手續左ニ奉申上候

一多賀參詣濟之上十一月廿九日加納宿泊晦日朝出立新加納迄相越候處上ノ方ゟ多人數之武士拔身之鎗或ハ銕砲所持押參り候付恐敷存兩人共往還北之方ゟ引込候林山之邊ニ通行見物致し罷在候處廿軒と申所ハ此邊ニ候哉と銕砲所持之人近寄參り相尋候付暫ク東之方ニ候旨申候處同風俗之人三人相越此邊ニ而人足雇ひ度候得共人夫無之甚迷惑致し候付而は今晩泊り迄相雇度旨申聞候付私共ハ多賀參詣仕歸路之者ニ候間何卒御斷申上度旨相答候處猶又拾人計相越中ニハ騎馬武士壹人大將分と相見此馬を壹人引呉候樣申聞候壹人ハ荷物持呉候樣だん〳〵相賴候付押而相斷候處更ニ不聞入手を引立是非々々持參り可申旨矢庭ニ引立候間何方之御家中ニ候哉不相辨候得共身柄之人ニ被賴此上斷申候而は如何之儀出來も難計と奉存候間不得止事平七ハ別當ニ相成兼吉儀は荷物少々持付添相越途中休息之所ニ而承候へは水戸浪士之由承知仕恐敷候得共斷も不相立段々附添參り芥見村ゟ出長良川渡り越天王村幷鳥羽村粟野村等ゟ止宿其節又々相斷歸村爲致呉候樣申聞候處先方申條ニは只今引取候而は其方共身之上無覺束大垣彥根を初所々固メも有之被召捕候も難計先々今晩は一宿可致と叮寧ニ取廻し呉必迯歸り候事無用と申聞候間甚心配之余り如何してなりとも迯歸り度と天王村泊ニ而村境相渡